

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## Research Trends on the Haida People in the Northwest Coast Region of North America

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岸上, 伸啓 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00010007">https://doi.org/10.15021/00010007</a>

# 北アメリカ北西海岸地域のハイダ民族に関する 研究動向について

岸上 伸啓  
(国立民族学博物館)

- |                                 |                  |
|---------------------------------|------------------|
| 1 はじめに                          | 6 文化・社会変化に関する研究  |
| 2 民族誌および総論的研究                   | 7 現代的課題に関する諸研究   |
| 3 人間集団の拡散・変化に関する遺伝学的研究および考古学的研究 | 7.1 政治問題         |
| 4 社会組織に関する研究                    | 7.2 遺骨・文化財の返還    |
| 5 文化に関する研究                      | 7.3 生態的環境をめぐる問題  |
| 5.1 ポトラッチ儀礼とトーテムポール             | 7.4 言語問題         |
| 5.2 神話・口頭伝承・ディスコース・象徴           | 7.5 アート          |
| 5.3 動植物利用                       | 7.6 観光           |
|                                 | 7.7 教育           |
|                                 | 8 結語—ハイダ研究の動向と課題 |

## 1 はじめに

ハイダ民族は、2021年現在、アメリカのアラスカ州南東部沿岸、およびその南西方向の沖合にあるカナダのハイダ・グワイ（旧称クイーン・シャーロット諸島）を拠点として生活を営んでいる（地図1）。現在のアラスカ側の拠点はハイダバーグであり、カナダ側の拠点はオールド・マセットとスキドゲイトである。カナダのハイダ人（ハイダ民族の人ないしは人びと）の多くは、リザーブ（オールド・マセットとスキドゲイト）を離れ、都市やそれ以外の市町村に移り住んでいる。カナダ国内のハイダ人の総人口は、約4,500人と考えられ、そのうちの約2,500人がハイダ・グワイに居住している<sup>1)</sup>。

ハイダ・グワイのハイダ人がヨーロッパ人と最初に接触したのは、スペイン人の探検家フアン・ペレス（Juan Perez）がハイダ・グワイのランガラ島（Langara Island）とアラスカのドル島（Dall Island）を来訪した1774年だと考えられる。当時、ハイダ人は他の先住民と毛皮交易などを行っており、ヨーロッパ人相手でも交渉がうまく、優れた交易者であると考えられていた。また、物品の略奪や奴隷を手に入れるために近隣の他民族の村々を時おり襲撃していたため、好戦的な民族でもあったと見られていた。

北西海岸地域の他の先住民の場合と同じく、ラッコの毛皮交易はハイダ人にも巨万の富をもたらし、首長層が富を蓄積するとともに、トーテムポール制作やポトラッチなどの儀礼活動が活性化した。華々しい先住民文化を開花させたが、その繁栄は一時的であった。1862年にバンクーバー島のビクトリア砦に伝わった天然痘がその周辺に滞在し



地図1 ハイダ・グワイの位置

(出典：時事新聞社ホームページ「世界遺産と先住民 ハイダグワイ」)

<https://www.jiji.com/jc/worldcup2018?s=v4&id=201410canada-haidagwai&p=201410canada-haidagwai-map>

\*本論文では、「ハイダグワイ」は「ハイダ・グワイ」、「スキディゲイト」は「スキドゲイト」と表記する。

ていた先住民グループに伝染し、彼らとその病気を母村へと持ち帰ったため、北西海岸地域全域に広がった。特にハイダ社会では全人口の70%~90%にあたる人が死亡したと推定されている (Boyd 1999; 岸上 2021a; 64-65)。このためハイダ社会は大きな変化を余儀なくされた。人口は1910年代半ばごろ最少となったが、それ以降、回復してきた。

ヨーロッパ人の入植やカナダ政府の先住民政策の実施はハイダ社会に大きな変化を引き起こす要因となった。1885年から1951年にかけてカナダ政府はインディアン法によってポトラッチなどの宗教儀礼の実施を非生産的かつ反キリスト教的であることを理由に禁止した。これによりポトラッチだけでなく、これに関連する親族組織や踊り、トーテムポール制作などまでもが衰退した。しかし1951年にカナダ政府が先住民の人びとに宗教の自由を認めると、ハイダ人は、大学や博物館、そしてそれらの機関に所属する研究者の支援を受けながら、ポトラッチやトーテムポール制作を復興し始めた。また、1960年代から米国先住民の影響を受けて、土地権の獲得などを目指す先住民運動も盛んになった。1960年代になると文化復興運動は「インディアン・ルネッサンス」と呼ばれるほどの活況を呈した。その後も伝統の創造的継承や政治的な権利獲得、経済的自立を目指した活動を続けてきた。

本論文の目的は、ハイダ民族に関する研究動向について文化人類学分野を中心に整理、検討することである。さらに、その整理・検討に基づいて今後の研究課題を提案したい。本論文の構成は、続く第2節では民族誌的研究、第3節では遺伝学的研究と考古学的研

究、第4節では社会組織に関する研究、第5節では文化に関する研究、第6節では文化・社会変化に関する研究、第7節では現代的課題に関する研究を紹介する。第8節では、研究動向と課題について整理し、考察を加え、結論を提示する。

## 2 民族誌および総論的研究

ハイダ民族についてはジョージ・ドーソン (George Dawson) やジェイムズ・G・スワン (James G. Swan), キリスト教宣教師, 文化人類学者らによる報告 (たとえば, Boas 1890; Collison 1915; Dawson 1880; Murdock 1934a; Niblack 1890; Swan 1876) があるが, ハイダ民族の研究の始まりは, ジョン・H・スワントン (John H. Swanton) による民族学的研究である。彼は, アメリカ自然史博物館のジェサップ北太平洋調査プロジェクトの一環として1900年9月末から1901年8月初めまでの約10か月間, ハイダ・グワイ (旧称クインシャーロット諸島) で現地調査を実施した。彼の調査目的は, ハイダ民族の宗教, 社会組織, 言語に関して記録を残すことであった (Swanton 1905a: 9)。その成果は, 『ハイダ民族学への諸貢献 (Contributions to The Ethnology of the Haida)』 (Swanton 1905a) として刊行されている。この民族誌は, 世界観やシャーマニズム・妖術, 医療, 慣習やタブー, 遊び (ゲーム), クランや家族などの社会組織, 歴史 (特にハイダ人の起源), 家族の紋章と名称, アートの中に表象される紋章と神話, 秘密結社とポトラッチ, スキドゲイトやマセット<sup>2)</sup>, アラスカのカイガニに伝わる昔話など, ハイダ民族の家族集団と村に関する民族誌的情報を満載している。本書は, ハイダ民族関連文献の中においてもっとも重要な基本文献であり, 文化人類学的研究のベースラインとなっている。また, スワントンは, ハイダ民族の暦, クラン制度, 秘密結社, 伝説や神話についても論文や報告書を出版している (Swanton 1903; 1904; 1905b; 1905c; 1908)。

スターンズ (Stearns 1981) は, カナダ社会に包摂され, インディアン法の下で管理されていた1970年代の (オールド・) マセットのハイダ・コミュニティにおいて世帯, 家族, 婚姻, 母系制, 経済や儀礼的交換について現地調査を実施し, ハイダ民族の文化と社会関係の変化と連続性を検証している。彼女は, ハイダ人が母系に基づいて儀礼生活を営み, 変化しつつも伝統的価値観を保持していることを例証した。ブラックマンらはハイダ文化の概略について解説している (Blackman 1990; Duff and Kew 1958; 岸上 2020)。また, 1960年以降1980年代までのハイダ文化についてはスターンズ (Stearns 1990) の著作がある。さらにアラスカ南東部プリンス・オブ・ウェールズ島のカイガニ・ハイダに関する写真民族誌的研究 (Blackman 1973a; 1981) やハイダバーク周辺の現代のコミュニティに関する報告 (奥田 2018a; 2018b) がある。

ハイダ文化に関する民族誌研究の数は多くはないが, 最近, ハイダ・グワイのオールド・マセット村でフィールド調査を行ったJ. ワイス (Weiss 2018) が, ハイダ・ネー

ション（ハイダ民族全体を意味する現在の名称）の過去，現在，未来に関する民族誌を出版した。彼は，ハイダ・グワイを，(1) ハイダ人が教育や仕事のために島外に転出しても，将来，戻るだろう場所，(2) 非ハイダ人が森林資源などを開発する場所，(3) ハイダ人のリーダーシップによって資源開発から守るべき場所であると指摘し，ハイダ・グワイにおけるハイダ人の未来を創り出すことの重要性を検討している。かつての植民地政府やヨーロッパ系移民は，カナダの先住民社会は消えゆく宿命を背負っていると考え，ハイダ人を「文明人」に変えようとした。しかし，現実には彼らは物理的に消滅することはなく，歴史を積み重ねさまざまな未来を創り続けている。ワイスは，ハイダ人の時間や移動，政治的リーダーシップは，ヨーロッパ系カナダ人による植民地体制の中で環境破壊の危機の克服や政治的主権の確立，自治権の獲得などが，カナダにおいて未来を創り出すための戦略の中核であることを指摘している。過去から現在に至る変化ではなく，未来を創り出すことに焦点をあわせた点に同書の独創性がある。

民族誌的調査は，おもにハイダ・グワイのオールド・マセット村で行われており，スキドゲイト村ではほとんど行われていない。このことは2つの村の形成史と関連しており（岸上 2021a: 65-66），伝統的文化が後者よりも前者に色濃く残っていると人類学者がみなした結果であると私は考えている。

### 3 人間集団の拡散・変化に関する遺伝学的研究および考古学的研究

ハイダ・グワイを含む北アメリカ北西海岸地域に人類がいつ移動し，住み始めたかを解明することは，人類史を検討する上でも重要な研究課題のひとつである。レスネクラ（Lesnek et al. 2018）は，かつての氷河の後退や海洋・陸上の生態環境を考慮に入れて考察した結果，旧大陸からアラスカに入ってきた人間集団は，約17000年前から南東アラスカを経由する北西海岸沿岸ルートを通して新大陸に拡散していったと主張している。また，リンドラ（Lindo et al. 2017）は，DNA分析によって北西海岸地域の先住民の間では少なくとも10300年以上の遺伝子の連続性が見られることを指摘した。さらに，彼らは，北アメリカ大陸のシュカ・カー（Shuká Káa, 旧地名 On Your Knees Cave）にいた人びとは別系統の人口集団が更新世後期に存在していたと推測している。シュールら（Schurr et al. 2012）は，トリンギット集団とハイダ集団の持つミトコンドリアDNA（mtDNA）とY染色体（Y-chromosome）を比較し，両者とも「北方的遺伝子」を共有している一方で，遺伝学的に見ると相互に独自の集団であることを提示した。また，母方クランの系統がmtDNAに強く影響をおよぼしている点や非先住民男性がハイダ人のY染色体の多様性に大きく影響をおよぼしている点を示した。オウイングズ（Owings 2019）は，ヨーロッパ人による植民地化が先住民集団にどのような影響を及ぼしたかを古代

DNAを援用しながら推定している。

氷河期後期と完新世初期に北アメリカ北西海岸地域では海進海退が見られた。13000年前から9500年前の間のハイダ・グワイ南部の海岸線は、現在、海中に没している一方、9200年前から3000年前にかけての海岸線は現在の海拔15メートルまでの雨林の中にある。現在の海岸線は3000年前から2000年前にかけての海岸線とほぼ同じ位置である。過去1世紀ないし2世紀の間の海岸線は今から9400年前の海岸線とほとんど変わらない。考古学と古生態学を統合して研究を行い、古代の海岸線をモデル化すれば、ハイダ・グワイ地域にある完新世初期の考古学遺跡を発見できるとフェジャとクリステンセン (Fedje and Christensen 1999) は主張する。また、マッキーとマクラレーン (Mackie, Fedje, and McLaren 2018) は、カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州沿岸の海面の変化を考古学的に再構成している。

フェジャらは、ハイダ・グワイにおける人類史と環境に関する論文集を刊行している (Fedje and Mathews eds, 2005)。彼らは、ハイダ・グワイの海進海退に関係する遺跡の位置に関する研究や環境データと考古学データを総合した文化史研究、口頭伝承に基づく文化史の再構成を行っている (Fedje and Mackie 2005; Fedje and Mathews 2005; Kii7iljuus (B. J. Wilson) and Harris 2005)。

考古学者でカナダ文明博物館 (現在のカナダ歴史博物館) の館長を務めたマクドナルドは、ハイダ民族に関する考古学研究 (MacDonald 1973; MacDonald and Cybulski 1973) のほかに、ハイダ民族のアートに関する著作を出版している。1875年頃から1900年頃にかけてハイダ・グワイのマセットやスキドゲイトを訪れた写真家がハイダの栄枯盛衰の様子を多数の写真に残している。マクドナルドは、敷地の図面および15の主要な村と複数の小さな村に残っている家屋とトーテムポールの目録を作成している。彼は、考古学やエスノヒストリーなどを利用してハイダ人の村々の物理的構造を示すとともに、家屋やトーテムポールがいかに神話や家族史、ハイダ人のコスモロジーと関係しているかを論じている (MacDonald 1983)。また、マクドナルドらは、ハイダ人の墓に関する考古学調査を実施し、その成果を報告している (Cybulski 1973; MacDonald 1973; MacDonald and Cybulski 1973)。さらに、マクドナルド (MacDonald 1989) はハイダ・グワイの文化遺産と遺跡についての本を出版している。T. オチャード (Orchard 2001, 2007; Orchard and Szpak 2015) は、伝統期から毛皮交易期にかけての経済活動の変化と持続性を環境考古学的な視点から解明している。

ラングドン (Langdon 1979) は、カイガニ・ハイダ (Kaigani Haida) は海洋適応しており、オヒョウや底魚類、シロザケを捕り、オヒョウやタラのいる浅堆に近い場所に集落を形成する一方、トリンギットは3、4種類のサケが遡上する川の近くの入り江に集落を形成すると指摘した。アラスカ南東部プリンス・ウェルズ半島沿岸で発掘調査を行ったモス (Moss 2008a) は、動物遺存資料から民族を同定することも、文化の適応や進化

的变化を特定することもできないと報告している。また、カイガニ・ハイダは、1700年代にディクソン海峡を横断してアラスカ島南部のプリンス・ウエルズ半島へと移住したが、モス (Moss 2008b) は、ハイダ人は、レッド・シダーがハイダ・グワイで現在と同じ程度に繁茂し始めた3000年前ごろにレッド・シダーを材料として大型カヌーを作ることができるようになり、海を航海するようになったと指摘している。

N. スロアン (Sloan 2003) は、カリフォルニア産アワビ貝がハイダ民族のアート、言語や家族の紋章に見られるようになったのは、欧米人との接触後のアワビ貝殻交易の影響であると指摘し、ブリティッシュ・コロンビア州南部およびアメリカのワシントン州におけるその交易について検討している。

アチェソン (Acheson 1995) は、ハイダ・グワイ南部のクングット・ハイダ人 (Kung-hit Haida) の1600年間にわたる居住パターンの研究を行い、欧米人との接触以前は小規模で、一年を通して住む核となる村を形成していたが、欧米人との接触後、大規模で、季節的に居住する、複数のリネージから構成される村に変化してきたことを明らかにした。すなわち、欧米人との接触がハイダの居住形態などを大きく変化させたことを例証した。フラッドマーク (Fladmark 1973) は、リチャードソン・ランチ遺跡を事例として19世紀のハイダの家屋について研究している。

マリンスとペインター (Mullins and Paynter 2000) は、多様な植民化勢力と独自の社会組織・資源を有する先住民集団との間でのコンフリクトの過程としてクレオール化 (creolization) を研究している。その際、ハイダ人がヨーロッパ人植民者を表象したモノを分析し、彼らが植民地化をどのように捉えていたかについて、さらには彼らと植民者との関係について検討している。

ハイダ・グワイに関する考古学研究は理論的な貢献をしている。そのひとつは考古学的知識の生産に関する研究であり、もうひとつは「aquapelogality」概念の提起である。ハイダ・グワイには同島の先住者の子孫であるハイダ人がおり、北西海岸地域において政治・社会的に重要な役割を果たしている。クリスチャンセンとデーヴィス (Kristensen and Davis 2015) は、ハイダ人の自治は、ハイダ人の歴史記録の存在とともに、考古学的思考や実践、文化遺産の管理に対してより社会・政治的、宗教的、そして認識論的アプローチをとることを促進してきた、と主張している。ヘイワード (Hayward 2012) は、ハイダ・グワイ南部のグワイ・ハーナス自然保護区とその保護区内にあり世界文化遺産に登録されたスカングアイ (アンソニー島) を事例として用い、島の人びとの暮らしや活動から生まれた陸域と海域の集合体を意味するアクアペラゴ (archipelago) という概念を提起した。

ハイダ・グワイでは、早稲田大学の考古学調査隊による民族考古学的踏査が行われている (菊池・熊林・佐藤・高橋 2005)。

## 4 社会組織に関する研究

ハイダ人をはじめとする北西海岸先住民は、狩猟・採集・漁労民でありながら複雑な社会組織を形成したことで知られている。その例としてクラン制とチーフ（首長）、ランク（身分, rank）の存在をあげることができる。

ハイダ人は、生まれた時点で母方のワタリガラス・クランかワシ・クランかのいずれかに所属することになる。それぞれのクランは人類学の用語で半族 (moiety) と呼ばれているが、各半族は、母系出自でつながる複数のリネージ集団から構成されている。2つのクラン間の関係は、ある時には対立的であるとともに、またある時には相互扶助的でもある。各リネージ集団は複数の母系拡大家族集団から構成され、各リネージや各拡大家族集団にはそれぞれリネージ・チーフや家長がいる。スワントン (Swanton 1904; 1905a) は、ハイダ・グワイのクラン制度について記録し、マードック (Murdock 1934b) は親族関係とそれに基づく行動様式について報告している。アラスカ南東部のカイガニ・ハイダの婚姻や親族、社会組織については、アレン (Allen 1954; 1955) の研究がある。

1930年代初めにはジョージ・ピーター・マードック (George Peter Murdock) がハイダ・グワイのマセットとスキドゲイト、アラスカのハイダバーグで調査を行い、親族関係・親族名称やポトラッチ儀礼、ランクに関する基礎的な研究を発表した。これらの研究は記述的ではあるが、新築・改築のためのポトラッチ、トーテムポールの建立や葬儀に関連するポトラッチ、復讐のポトラッチ、汚名を払拭するためのポトラッチについて詳細な情報を含んでいる。彼は、これらのポトラッチ儀礼の実施がクラン内における社会的ランクや政治的地位とどのように関係しているのかについて説明している。また、親族関係に基づく儀礼の組織化と実施などの行動規範についても報告している (Murdock 1934a; 1934b; 1936)。

マードック (Murdock 1936) によるとハイダ社会では政治的ランク（地位）と社会的ランク（身分）という2つのシステムが相互に複雑に絡み合いながら作動しており、それらはポトラッチ儀礼の実施と深く関係しているという。政治的ランクには、各拡大家族のチーフと各クラン（リネージに相当）のチーフがあり、両方とも母系で継承される。一方、社会的ランクには、貴族、平民、奴隷があり、それらの身分は世襲制ではなく、両親が財の分配（ポトラッチ）を行ったかどうかによって子供の身分が決まる。また、彼は人数上、貴族の数が平民の数よりも多かったことを指摘している。マードック (Murdock 1936: 3) は、ポトラッチとは、主催者がもう一方の半族 (moiety) のメンバーを招待し、財を分配する儀礼であり、分配される財には交易毛布、銅板紋章、衣類、食器、角製スプーン、マットなどがあつたと報告している (Murdock 1936: 11)。そしてポトラッチ儀礼は、ランクを付与すること、証明すること、もしくは支持することと深く関わっている。さらに、ポトラッチ儀礼の際には、ダンスが披露され、宴会が開催された。

リネージや拡大家族の長（チーフ）の継承については、スターズ（Stearns 1984）の研究がある。チーフが亡くなった場合、その人物に母系的系譜上でもっとも近い関係にある最年長者がチーフの地位を継ぐのが一般的である。具体的には、亡くなったチーフの次弟、そのチーフの長姉の長男、そのチーフの次に若い平行イトコ、同居している最年長のオイらのいずれかである。スターズは、後継者の決め方には、(1) 先述した最年長者による継承規則を適用する方法の他、(2) 現チーフが亡くなる前に指名する方法、(3) 親族が集まって協議し、選出する方法、(4) ポトラッチ儀礼を行うことによって後継者として認めてもらう方法などがあつたと報告している（Stearns 1984: 190）。ハイダ人のチーフに関しては、ガフ（Gough 1982）の興味深い研究がある。1850年代半ばハイダ・グワイのイーデンショーは、強力な首長の地位を獲得しようとしていた。1852年にハイダ・グワイでアメリカの交易船（Suzan Sturgis 号）がマセット村のハイダ人によって海賊行為にあつた事件が起こった。この時、同交易船の水先案内人であつたイーデンショーは海軍士官によって共犯を疑われていたが、その嫌疑を巧みにかわし、自分に有利になるように立ち回り彼自身の危機的状況を乗り切った。この事例はチーフになることを目指すイーデンショーが欧米人との遭遇によって利益を得る能力や欧米人を最大限に利用する能力を持っていたことを示している。ガフは、ハイダ民族のチーフの特性や欧米人がチーフをどのように見ていたかに関する分析を行った。

## 5 文化に関する研究

### 5.1 ポトラッチ儀礼とトーテムポール

ハイダ社会においてポトラッチ儀礼とは、財を贈与ないしは分配することであり、本来、祝宴などは含まれない。この点は、バンクーバー島の先住民クワクワカワクウのポトラッチ儀礼とは異なる（立川 1999a; 2016）。ロスマンとラベル（Rosman and Rubel 1986）は、北西海岸地域のティムシアン、トリンギット、ハイダ、ヌーチャーヌヒ、ペラクーラ、そしてクワクワカワクウの北西海岸地域の6民族におけるポトラッチ（交換システム）儀礼と社会構造との関係についての共通性と差異（ヴァリエーション）を既存の民族誌を用いて構造主義的視点から比較検討した。そして、ランク制度や姻族、ライバル性、柔軟性が重要な役割を果たすポトラッチ儀礼モデルを構築している。彼らは、ポトラッチ儀礼は個人のみならず社会にとっての通過儀礼だと指摘している。彼らのポトラッチ儀礼モデルは、北西海岸地域だけでなく、メラネシアやポリネシアの諸社会の交換システムに当てはまると主張している（Rosman and Rubel 1986: 201-207）。彼らの主張には批判も多いが、ポトラッチ儀礼を交換システムとしてモデル化を試みた点は評価したい。ムーニー（Mooney 1971）は、ポトラッチ儀礼などに見られる財のやり取りを「互酬性」と「再分配」の視点から分析している。

ロバート・デイヴィッドソン (Robert Davidson) は、1981年11月6日と7日にハイダ・グワイのマセットにある学校 (George M. Dawson School) で子どもたちにハイダ名を付与するために、また養子縁組のために、ポトラッチを開催した。このポトラッチに招待されたU. ステルツァー (Steltzer 1984) は同ポトラッチの写真集を刊行している。同書には、ポトラッチの主催者、関係者や招待者の発言が収録されているため、1980年代に開催されたハイダ人のポトラッチ儀礼の貴重な記録である。

ポトラッチ儀礼の時に建立されることが多い彫刻が施された木柱 (トーテムポール) は、北西海岸先住民文化を代表する文化要素である。M. バーボウ (Barbeau 1950) は、ハイダ・グワイに残っているトーテムポールに関する写真付き解説書を出版している。ハミルトン (Hamilton 2014) は、残っているハイダ民族のトーテムポールを体系的に分析し、ハイダ民族のトーテムポールはハイダ社会の構造を反映していると指摘している。

## 5.2 神話・口頭伝承・ディスコース・象徴

ハイダ文化の神話や口頭伝承、公的な場での発言 (ディスコース)、象徴物を対象とした研究が存在している。たとえば、ハイダ文化においてワタリガラスはクランやリネージを象徴する重要な動物である。フォン・ホップフガルテン (Von Hopffgarten 1978) は、ハイダ文化におけるワタリガラスに関して動物学的かつ象徴論的研究を行った。彼女は、ワタリガラスは世界の中での人間自身を比喩的に映し出した存在であり、言葉によって何事かを起こす者であると指摘している。岸上 (2021b) はハイダ人とワタリガラスとの関係、特にワタリガラスの文化的特徴と重要性に関して北アメリカ北西海岸地域および環北太平洋地域における文化的共通性 (Mashiko 2006) の視点から検討を加えている。

ハイダ人の口頭伝承やディスコースに関する研究も行われている。かつて歴史学者は口頭伝承を歴史の再構築に利用することはなかったが、最近の研究ではそれを歴史的研究や分析に積極的に取り入れようとする動きが見られる (Nang Kiing, aay7uuans (J. Young) 2005; Sparrow 1998)。たとえば、ハイダ人のチーフであったアルバート・エドワード・イーデンショー (Albert Edward Edenshaw) に関するチャールズ・ハリソン (Charles Harrison) 牧師の出版記録やイーデンショーの子孫の補足的な記述が100年以上にわたり、人類学的資料として利用されてきたが、スパロー (Sparrow 1998) はこれらの資料はイーデンショーを正確に捉えていないと主張する。スパローは「ハイダ人のチーフの中でもっとも偉大である」と言うイーデンショーの自らについての主張に疑義を投げかけるハイダ人の口頭伝承を提示し、限定された少ない情報源に基づく歴史再構成の問題点を指摘している。

ベルシャー (Boelscher 1985; 1988) は、1979年から1981年にかけて (オールド・) マセットでハイダ人の社会生活および神話世界に関するディスコースや象徴的行為を調査

し、民族誌を上梓している。具体的には、半族とそれを構成するリネージの分節化、リネージ内のランクとそれらが互酬的なやり取りを通して作り出され、維持される様態、交渉可能な親族のカテゴリー、有形無形の文化財、ハイダ民族の神話世界に出てくる曖昧さ (ambiguity) を検討している。現在もかつてと同じように、ハイダ人が社会的価値や世界観に基づいて交渉 (社会的行動) を行うことによって、いかに社会的そして政治的目的を達成しているかをきめ細かに描き出している。また、彼女はハイダ人の公的な場での発言やその脈絡について分析している (Boelscher-Ignace 1991)。スペンサー (Spencer 2018) は、ハイダ民族の口頭伝承の英語翻訳に関する研究を行っている。

その他、ハイダ民族の神話や伝承 (Swanton 1905b, 1905c, 1908; 山越 2003a) や入れ墨 (桑原 2010)、カレンダー (Swanton 1903)、歌 (Enrico 1996)、輪廻 (Stevenson 1975)、青色 (Ancheta 2019) に関する研究も行われている。

### 5.3 動植物利用

ハイダ人は他の北西海岸先住民族の人びとと同じく、地元でとることができるサケやオヒョウ、ニシンなどの魚類やアザラシやトド、クジラ、シカ、クマなどの動物類および多様な植物を利用してきた。

ターナー (Turner) は、ハイダ人による植物の分類や利用に関する研究を先住民の視点と科学的視点の両方から行っている (Turner 1973; 1974; 2001; 2004)。たとえば、彼女は、ハイダ、ベラクーラ、リローエットの3民族の言語に見られる植物名を意味論的にまた分類学的に研究している。各言語とも「植物」に相当する総称を持っていないこと、属レベルの植物名は150ぐらいあること、50%以上の名称が植物種に対応していること、多くの名称が伝統的な信仰、利用、植物固有の特徴、他の植物との形の類似性などを反映していることなどを詳細に報告し、検討している (Turner 1973)。ノートン (Horton 1981) は、1774年に初めてヨーロッパ人に接触したアラスカ南東部のカイガニ・ハイダの現代と過去の植物利用、植物名、処理や貯蔵方法について研究し、接触以前の時代においてもハイダ人にとってすでに植物食が重要であったことを指摘した。ハイダ人はアメリカハリブキという植物を伝統的な薬として利用しているが、それを研究したデーグル (Deagle 1988) は、先住民の薬は精神的かつ物質的特性の両方を持つと指摘している。

ハイダ人は、トリングットら他の先住民族同様、長きにわたって魚介類を利用してきた。モスはハイダ人にとって食料資源としての貝類が重要であることを解明した (Moss 1993)。また、海鳥の利用に関する研究を行っている (Moss 2007)。オチャードとウィーゲン (Orchard and Wigen 2016) はオヒョウの利用について民族誌的データ、エスノヒストリー・データと考古学的データを総合して研究を行っている。

ターナーらは、ハイダ社会の生態学的資源と文化的資源は、社会・生態学的レジリエ

ンスのための多様性の源泉であると主張している (Turner, Davidson-Hunt, and O'Flaherty 2003)。

## 6 文化・社会変化に関する研究

ハイダ社会は欧米人との接触、植民地化、国家への統合、同化政策の実施によって大きく変容を遂げてきた (Harris 2017)。社会・文化変化のプロセスの解明はハイダ研究の重要課題のひとつである。1900年前後にスワントンらによって伝統的ハイダ社会に関する民族誌的研究が行われ、その成果がその後の変化を理解し、考察する上でのベースラインとなった。

欧米人との接触により北西海岸地域の先住諸民族の間にインフルエンザや天然痘などが広がり、先住民人口が激減した。ボイド (Boyd 1999) はハイダ社会を含む北西海岸地域全域の先住民人口の変化に関する研究を出版している。岸上 (2021a) は1862年にバンクーバー島ビクトリアからカナダ太平洋沿岸全域に天然痘が広がり、ハイダ民族の人口が3分の2以下になり、クワクワカワクウ民族の場合 (立川 1999b) と同様にハイダ社会・文化は劇的な変化を余儀なくされたことを報告した。

ハイダ人を含む北西海岸先住民は欧米人と接触後、おもに狩猟・漁労・採集に従事するとともにラッコやトド、シカやクマ、ビーバーの毛皮を欧米人と交易することによって生計を立てていた。19世紀半ばになるとサケの商業漁業や缶詰業、森林伐採業などの賃金労働にも従事するようになった (Knight 1978)。1875年頃から1900年頃に英国聖公会派とメソヂスト派は牧師をハイダ・グワイのハイダ人の村に派遣した。ヘンダーソン (Henderson 1974) は、宣教師の活動がハイダ人の居住様式や生業パターンを再編成させたことと指摘している。欧米人の植民者がカナダ太平洋沿岸地域において増加するに従い、先住民はカナダ政府が創り出したリザーブに押し込められた (Harris 2002)。その一方で、交易や賃金労働のために先住民がビクトリアなどに移住するようになり、入植者と先住民から構成される都市や町が形成された (Edmonds 2010)。ダフ (Duff 1964) は、19世紀から20世紀後半にかけての欧米人によるハイダ社会などへのインパクトに着目した社会変化研究を出版している。また、オランダのファン・デン・ブリンク (Van Den Brink 1974) は1876年頃から1970年ごろまでのハイダ民族の文化変化について調査し、著作を出版している。

1960年代から1970年代にかけてマーガレット・ブラックマン (Margaret Blackman) とメリー・スターンズ (Mary Stearns) の2人がハイダ・グワイの (オールド・) マセットでポトラッチ儀礼や葬儀、社会組織などに関するフィールド調査を実施し、ハイダ社会の歴史的連続性と変化に関する研究成果を出版している (Blackman 1973a, 1973b, 1976, 1977; Stearns 1975, 1977, 1981, 1984, 1990)。彼女らの研究はスワントンやマー

ドックの研究成果と比較することにより、ポトラッチ儀礼や葬儀の歴史的变化を詳細に検討している。ブラックマン (Blackman 1973b) は葬儀に関連して、宣教師の奨励によってハイダの人びとが墓柱 (トーテムポール的一种) の建立ではなく、墓石を立てるようになった変化を先住民の視点から検討している。また、ブラックマン (Blackman 1976) は、19世紀から20世紀にかけての北西海岸諸文化におけるアートや建築物、儀礼を検討し、文化変容は否定的な変化のプロセスではなく、文化を構築するプロセスであると主張している。さらに、ブラックマン (Blackman 1977) は、ハイダ社会では本来、ポトラッチ儀礼は祝宴とは区別されていたが、現在では、祝宴はポトラッチ儀礼の一部であると考えられるようになったと指摘している。このような変化は、ハイダ人とヨーロッパ系カナダ人との相互変容の結果として起こったと考えている。一方、スターンズ (Stearns 1977) は、親族関係の変化がマセット村のハイダ人の儀礼に及ぼした諸影響を調査した。墓石を立てることを事例として、ハイダ人がランク (身分) と親族に関する伝統的義務を履行するために、どのように儀礼関係を再組織化したかを民族誌的に描いて見せた。現金や物品を主催者に提供することや一方の半族による儀礼サービスに対する支払いを分析することによって交換における歴史的連続性を示した。マセットのハイダ人の見解によると、ポトラッチ儀礼の競争性は、コミュニティ全体の協力に取って代わられた。現在のポトラッチ儀礼では母系集団と双系集団の両方が動員される一方で、同儀礼での役割分担や寄付額の大きさを精査することによって、半族制度がいまだに重要な役割を果たしていることが判明した。

## 7 現代的課題に関する諸研究

### 7.1 政治問題

先住民族のハイダ人にとって、カナダにおける植民地主義支配から脱却し、土地権や自治権などの先住民の権利を獲得し、政治的に自律化することは最重要課題のひとつであった (Von Der Porten 2012)。

ヨーロッパからカナダ西海岸地域への入植が本格化したのは19世紀後半以降である。また、1867年にカナダは自治領になったが、カナダ政府は1876年にインディアン法を制定し、先住民をリザーブに隔離しつつ同化政策を実施した。1884年にインディアン法を変更し、1885年から1951年にかけてポトラッチ儀礼等を禁止した。この期間に先住民の遺骨や文化財は、研究や法的処置を目的としてカナダやアメリカ合衆国の博物館などに没収、移管されたために、現地の先住民文化は急激に衰退した。1950年代に先住民に宗教の自由が認められると、ポトラッチ儀礼やトーテムポール制作は復興し、1960年代には「インディアン・ルネッサンス」と呼ばれる文化の復興期を迎えた。また、アメリカの公民権運動や先住民運動の影響を受け、カナダでも先住民運動が盛んになり、1960年

代以降は土地権処理のための政治交渉が開始され、先住諸民族は徐々に政治的自律化や自治の獲得へと向かい始めた。

イギリスやカナダの政府が、全土に入植者を受け入れ、先住民から土地や資源を取り上げる根拠、すなわち植民地化を正当化する根拠は何であったのだろうか。ブリティッシュ・コロンビア州では19世紀から20世紀前半にかけて植民者のいるべき空間と先住民のいるべき空間の両方が創り出された。グレッグ＝マーティン (Grek-Martin 2017) は、クイーン・シャーロット諸島 (ハイダ・グワイ) にカナダ政府によって調査のために派遣された地質学者ジョージ・ドーソン (George Dawson) の1880年の報告書を取り上げ、ヨーロッパ人やヨーロッパ系カナダ人による将来の入植や資源開発についてドーソン自身が思い描いたことをどのように正当化したかを分析した。同報告書が植民地化する側の語りとして先住民であるハイダ人の衰退や消滅が必然であるかのように描いていることを例証した。

1970年代半ば以降のカナダでは、各地の先住民族の先住権や土地権についてカナダ政府と当該先住民族との間で政治的な話し合いや法廷闘争が行われた (Christie 2005; Olynyk 2005; Slattery 2005)。特にブリティッシュ・コロンビア州の先住民族の大半は、イギリスやカナダと土地譲渡条約を締結していなかった。このテーマに関連し、ハリス (Harris 2008) はブリティッシュ・コロンビア州における先住民の漁業権について考察している。フォウストカ (Foustka 2012) はハイダ民族のランド・クレームについて論じている。プルナー (Pruner 2005) は、ニュージーランドのマオリ民族とカナダのハイダ民族の権原 (aboriginal title) とその消滅について比較検討している。

ハイダ民族も他の北西海岸先住民族と同様に政治的自律化を目指した。クリッペンステイン (Klippenstein 1991) は、1966年から1990年にかけてのハイダ民族の政治的自律化をめぐる動きを考察している。ハイダ・ネーションは1980年代にハイダ・グワイの環境保護を争点としたカナダ政府やブリティッシュ・コロンビア州政府との政治的交渉の過程で成立したと考えられる (Gill 2008; Wilson-Raybould 2019)。2010年6月17日にハイダ・ネーションの代表者は、19世紀にカナダ政府によって付与された「クイーン・シャーロット諸島」の名称を正式に返上し、「ハイダ・グワイ」の名称を採用するための儀式を執り行った。ワイス (Weiss 2020) は、ハイダ・ネーションはこの儀式によって、植民者政府に敬意を払いつつ、ハイダ的なやり方で新たな関係を創出し、自らを海外の政府と同等の独立したネーション (政治体) であることを示したと主張している。先住民の自治には複数のモデルがあるが、ペニケット (Penikett 2012) はその中のユニークなもののひとつとして、ハイダ・ネーションの事例を検討している。

ハイダ・グワイは海に囲まれ、かつアメリカ合衆国のアラスカ州とカナダのブリティッシュ・コロンビア州が隣接する海域に位置する。そのためブリティッシュ・コロンビア州のハイダ民族の自治権に関連して陸域と海域のエコシステムの持続可能な管理が重要

課題となっている。これを解決するには、関係政府間で平等な共同管理の合意が必要である。メイズ (Mays 2021) は、ハイダ・ネーションの設立以降の統治の統治戦略や自治の変遷を検討している。

ハイダ民族の伝統法や倫理やハイダ・ネーションの憲法に関する研究も行われている (Harrison 1925; Sharp 1997; Young 2000)。ハイダ人は独自の正義の観念と犯罪への対処の方法を有していた。しかし彼らの制度は、植民地化した主流社会によって抑圧され、現在はカナダの法制度にとって代わられた。マクガイア (McGuire 2019) は、ハイダ民族の法、正義について研究し、彼らにとっては説明責任と証言、ポトラッチ儀礼の実施、文化の存続、問題解決が重要であることを指摘している。また、クアイ (Quail 2014) は、ハイダ民族の伝統法では尊敬の原理 (Yah'guudang) が重要であると報告している。

## 7.2 遺骨・文化財の返還

アメリカ合衆国では、1990年にアメリカ先住民墓地保存・返還法 (The Native American Graves Protection and Repatriation Act of 1990, 以下 NAGPRA) が制定され、1996年に施行された。これによってアメリカ先住民社会の間では、欧米人によって持ち去られた祖先の遺骨や文化財の現地への返還を求める動きがより一層活発化した。一方、カナダでは、1980年代にカナダ政府から文化財の返還に成功したアラートベイのクワクワカワクウ民族のような事例はあるが、1990年頃から先住民が祖先の遺骨や文化財の現地への返還を求める動きが本格化した。2010年には、英国にあるオックスフォード大学ピット・リヴァーズ博物館からハイダ人の祖先の遺骨がハイダ・グワイに返還された。この画期的な出来事は、返還活動の事例のひとつである。この頃からカナダ先住民への遺骨や文化財の返還に関する研究が積極的に行われるようになった (Krpmotich and Peers 2013; Simpson 2018; St. George 2012)。

C. クルムボティック (Krpmotich 2011; 2014) は、世界各地の博物館によるハイダ人の祖先の遺骨返還の過程について現地調査を実施し、民族誌を出版している。ハイダ・グワイの人びとは、1990年代半ばより祖先の遺骨返還活動やその活動に関連する儀式のために、クランの紋章の入ったボタン・ブランケット (マント) や木箱を作り、何百人もの人を招いて宴会を催し、新しい歌やダンスを披露してきた。彼女によると、ハイダ人は、縫うことや編むこと、踊ること、料理すること、宴会を開催することなどの体験を共有することによって、祖先への尊敬の念や親族関係の再確認を行い、集合的記憶やモノを生み出し、文化的アーカイブ (cultural archive) を形成してきたと言う。なお、文化的アーカイブは、儀礼具などのモノを用いて人びとが行う活動やそのやり方、モノを通して人びとが記憶していること、そしてその方法から構成されていると言う (Krpmotich 2014: 12-13)。彼女は、遺骨返還をハイダ・グワイ地域の歴史と文化の脈絡において考察し、それが先住民コミュニティと博物館との間のポスト・コロニアルな行為であるの

みならず、ハイダ人の親族関係（家族間）に深く関係する行為であることを検証した。すなわち、彼女は祖先の遺骨返還をより広いハイダ人の親族関係という脈絡に位置づけることによって、両者の間に密接な関係があることを発見した。そしてハイダ人のアイデンティティの基盤となる親族関係は、21世紀の祖先の遺骨返還活動の中で社会関係を構造化させ、財や資源、モノの適切な使用を導く文化的アーカイブの形成を促したと主張している（Krpmotich 2014: 173-174; 176）。

C. クルムポティックとL. ピアズは、オックスフォード大学ピット・リヴァーズ博物館のハイダ物質文化プロジェクトを紹介し、検討を加えている（Krpmotich and Peers 2011）。英国の研究者・学芸員と先住民コミュニティの間にネットワークを形成し、長期にわたる両者の関係に基づいて対話を行い、博物館が収蔵するハイダ民族関連資料の由来や保存のやり方、カタログ作成、文化的表現と芸術的刷新、言語などについて新たな知識を生み出そうと試みている。彼らは、この対話的实践について、文化財の地元への返還を促進するとともに、物質文化を通してハイダ人は文化的アイデンティティの生成・継続を促進していると主張している。

### 7.3 生態的環境をめぐる問題

ハイダ民族とその文化の存続・発展はハイダ・グワイの健全な生態的環境の存在と表裏一体の関係にある。ハイダ・グワイの環境をめぐる現代的問題は、(1) ハイダ・グワイの環境保護、(2) 国立公園、(3) 資源・環境管理に関する諸課題に大別できる。

ブリティッシュ・コロンビア州では19世紀から森林を伐採し、木材資源を国内外に移出することが重要な産業のひとつであり、同州の経済発展を支える原動力のひとつであった。ハイダ・グワイには、温帯雨林や希少種の動植物が生息している。20世紀の過剰な森林伐採によって、それらの動植物は環境的危機に見舞われた。1980年代より地元のハイダ人は森林伐採に反対する環境運動を展開し、外部の諸団体と連帯しながら、多国籍企業やカナダの連邦・州政府と法的な戦いを繰り広げてきた。その結果、新たな環境統治形態を生み出した。タケダ（Takeda 2015）は、そのプロセスを記述し、分析している。

1985年にハイダ人は、ブリティッシュ・コロンビア州ハイダ・グワイのアスリー・グワイ（Athlii Gwaii, 旧称ライル島）で森林伐採に反対するため、道路封鎖という直接的な反対行動をとった。フォン・デル・ポールテン（Von Der Portne 2014）によると、この行動はハイダ民族とカナダ政府・ブリティッシュ・コロンビア州政府との関係を大きく変えたと言う。この事件をきっかけに、ハイダ民族の先住権と先住権原をカナダ政府に承認させることになり、森林の協働管理、森林環境の保護、政治的自治に進む第一歩となったと指摘する。

モレスビー島南部に位置するアスリー・グワイでの森林伐採が問題となり、ハイダ・

ネーションが開発に対し反対運動を繰り広げた結果、ハイダ・ネーションとカナダ政府の間で協定が締結され、それに基づいて1988年にグワイ・ハーナス国立公園が設立され、ハイダ・ネーションとカナダ政府による共同管理が始まった (Keller 1990; Langdon, Prosper, and Gagnon 2010; Lee et al. 2021)。公園の共同管理に関するグワイ・ハーナス協定は、政府の政策策定と先住民の主権にかかわる点できわめてユニークな協定である。ホークス (Hawkes 1996) は、この協定が土地利用の紛争を解決する手段となりえるかどうかという観点からこの協定の評価を試みている。また、トムリンソンとクローチ (Thomlinson and Crouch 2012) は、ハイダ・ハーナス国立公園におけるカナダ公園局とハイダ人との共同管理を資源管理についてのグローバルなスタンダードから検討している。小林 (2014) は、世界遺産グワイ・ハーナス国立公園の現状について次のように報告している。カナダにおいて国立公園は、政治的、文化的、経済的、自然環境の諸要因が相互に関係しあう結節点である。そこは国家が自然に介入する場であり、国の公園局は土地、人びと、そして自然の考え方を管理してきた。ポーター＝ボップ (Porter-Bopp 2006) は、グワイ・ハーナス国立公園とハイダ世界文化遺産遺跡の創出について検討し、ヘゲモニックな政府のナショナリズムを巧妙に浸透させる側面があると主張する。そしてカナダにおいて植民地主義はいまだに国家制度や国有地を通して機能し続けていると指摘している。

ディーン (Dean 2009) は、ハイダ・グワイにおける環境をめぐる先住民政治の展開について検討し、ハイダ人による環境運動は、ランド・クレームと言う公式の政治的対応プロセスとは違った非公式な脱植民地主義化の手段となっていることを指摘した。また、奥田 (2018b) は、カイガニ・ハイダ人が住むアラスカ南東部地域の生態環境の保全について報告している。さらに、環境保全と関連してハイダ・グワイに持ち込まれた外来種をいかに管理するかという研究も行われている (Columbia 1999)。

資源管理に関する研究は、水産資源・海洋環境の研究と森林資源・森林環境の研究、土地資源の管理の研究に大別できる。たとえば、レポフスキとカールドウェル (Lepofsky and Caldwell 2013) は、北西海岸先住民による魚介類の伝統的管理を、捕獲方法、増殖戦略、保有制度、世界観・社会関係という4側面から整理し、検討を加えている。

ブリティッシュ・コロンビア州北部での太平洋北部沿岸統合管理地域計画 (the Pacific North Coast Integrated Management Area) が進められ、ハイダ・ネーションはこの計画の実施プロセスにカナダ連邦政府とともに参画している。ジョーンズ、リグとリー (Jones, Rigg, and Lee 2010) は、尊敬、バランス、互惠性といったハイダ人の価値観や倫理観について報告した後、この管理計画においてハイダ人が果たすべき新しい役割を検討した。彼らは、ハイダ・グワイではこの共同管理に基づく地域漁業とコミュニティの持続可能性をますます強調するようになるだろうと期待を寄せている。一方、ローリングとヒンズマン (Loring and Hinzman 2018) は、ハイダ人が環境統治をどのように

考え、海洋環境管理において何を重視しているかを研究した。その結果、彼らの考え方と国家の価値観の間には齟齬があることなどを指摘している。

国家による先住権の承認は、国家による土地利用計画に変更を迫る潜在力を有している。ハイダ人は領土権をめぐるデモや法廷闘争を通して2009年にブリティッシュ・コロンビア州政府と協力協定を締結した。しかし、ガルブレイス (Galbraith 2014) は、カナダ政府のエンブリッジ・ノーザン・ゲイトウェイ・パイプライン・プロジェクト (Enbridge Northern Gateway Pipeline Project) のためにカナダ政府が始めた環境評価は、ハイダ人が採用した環境評価のやり方と矛盾する可能性があるとして指摘する。クリスト (Crist 2012) は、ハイダ人が、このプロジェクトに対し、ハイダ・グワイの環境を守るためにコミュニティ間で連合を組んで反対した行動を分析している。

近年、商業的価値が高いニシンの管理についてカナダ政府とハイダ・ネーションの間で紛争が発生している。ニシンの卵である数の子は日本において需要が高いため、高利益を上げることができる魚種である。このため、一般漁民がハイダ・グワイ周辺の海域に出漁し、ニシンを漁獲していることに対してハイダ・ネーションは懸念を表明し、ハイダ・グワイ周辺海域のニシン資源を守るために商業漁業に対し漁獲規制を敷くようにカナダ政府に訴えた。連邦裁判所は、カナダ水産海洋省 (DFO) 大臣による2015年のハイダ・グワイにおけるニシンの商業漁業の解禁を差し止める判決を下した。ジョーンズ、リグとピンカートン (Jones, Rigg, and Pinkerton 2017) は、ハイダ・ネーションがニシン資源の保全のために採用した戦略が成功した理由として、(1) 現在のニシン資源状態への危惧、(2) 先住権の存在、(3) ハイダ民族とカナダ政府の共同管理協定の存在、(4) 地元とブリティッシュ・コロンビア州沿岸域で実施したフォーラムでの戦略的活動という4つの要因を挙げている。

ニシンは、ハイダ人にとって食料源、収入源、生き方や文化の源のひとつである。現在、ニシンは生態系内の他の生き物の餌魚としての生態的重要性、先住民の伝統的な食料として文化的重要性、そして日本市場に輸出される数の子採取は経済的価値があり、それらの間に齟齬をきたしている。ラム (Lam 2015) は、既存のニシンの管理原則やそれと関係するハイダ人の倫理観と価値観、そして商業的な数の子漁、食料漁、漁業用の餌をとるための漁との関連から子持ち昆布漁の実践を吟味している。その結果、さまざまな利害集団のウェルビーイング、自律と正義を考慮に入れたニシン漁を持続可能にするための実践的倫理の枠組みを提案している。ソートン (Thornton 2015) は、ハイダ人らによるニシンの育成 (cultivation) の実践とイデオロギーを研究している。ニシンはアラスカ南東部やカナダ国ブリティッシュ・コロンビア州北部の海域環境におけるキーストーン種のひとつである。ハイダ人らはニシンやその魚卵を採捕し、食べると同時に、春季の産卵期のニシンに対しては育成を行ってきた。ソートンは、この育成技術およびそれに関連する知識は現在の漁業管理にも活用できると主張している。また、ジョー

ンズ (Jones 2007) もニシン資源の管理にはハイダ人の伝統知を利用すべきだと指摘している。

ハイダ・グワイでは地球工学 (geoengineering) の実験的実践がアメリカの民間会社とオールド・マセツ村との契約で実現した (Buck 2014; 2018)。ラス・ジョージ (Russ George) は、ハイダ・グワイのオールド・マセツの村議会を説得し、2012年に120トンの硫酸鉄の鉄くずをハイダ・グワイ周辺の海域に投下した。これは、鉄分などの栄養分を含んだ海域を創り出すことによってサケの生育を促進させるとともに、二酸化炭素を吸収させることによって地球温暖化を抑制しようとする地球工学プロジェクトであった。現時点ではその効果は不明のままであるが、ガノンら (Gannon 2016; Gannon and Hulme 2018) はこのハイダ・サケ回復会社 (Haida Salmon Corporation) の海洋施肥プロジェクトという地球工学プロジェクトを分析した。また、ホートン (Horton 2017) は、このプロジェクトに関わるナラティブの分析を通して、環境がいかに言説として構築されているかと言うプロセスに検討を加えている。

ハイダ・グワイでは、森林伐採が過剰に行われ、かけがえのない生物多様性や自然環境のみならず、ハイダ文化も消滅の危機に直面している。タケダとロプケブ (Takeda and Røpkeb 2010) は、ハイダ・グワイの森林をめぐる長期にわたるハイダ人と政府との間の紛争の最新の状況と、ブリティッシュ・コロンビア州政府との協働による土地利用計画を通して紛争を解決させようと試みてきたことを精査した。彼らは、この共同管理のプロセスを権力関係の視点から分析するとともに、ハイダ人が集合的な力を拡大させ、抑圧や支配により効果的に抵抗するための機会であるという視点から分析した。また、森林資源管理とウェルビーイングとの関係に着目する研究も存在する。エコシステムに基づく管理 (Ecosystem-based management) は、生態学的統合性と人間のウェルビーイングの両方に関わっている。森林資源に依存しているハイダ・グワイのコミュニティは、ハイダ・ネーションとブリティッシュ・コロンビア州との共同管理を含む計画や政策の実施に参画している。また、ギラニ、インズとケント (Gilani, Innes, and Kent 2018) は、ハイダ人の森林管理を事例としてウェルビーイングを測定するための方法を検討している。

ハイダ・グワイにおける土地管理や土地利用計画についても研究が行われた (Lincoln 2018; Townsend 2009)。ハイダ・グワイにおける土地利用は、ハイダ人とそれ以外のステークホルダーとの合意交渉によって決めることができるようになっている。アウトフォーロフ (Astofooroff 2008) は、交渉のプロセスの長所と短所について検証している。

上記のほかに、環境や資源についてのハイダ・ネーションとカナダ政府とによる共同管理における伝統的環境知識の活用に関する研究 (Houde 2007) や環境インパクト評価に関する研究 (Shapcott 1989)、気候変動のインパクトに関する研究 (Conner 2003) な

どが存在する。コナー (Conner 2003) は、気候変動の諸影響に対するハイダ人の2つのコミュニティの脆弱性や適応力、レジリエンスの地域的特性に関する調査を行った。そしてコナーは、データ収集における複数の方法を使用することとステークホルダーの参加型調査の有効性を指摘する。さらに環境保護運動や観光を通じた文化再生に関する報告も出版されている (大岩 1998; 辻 1998)。

#### 7.4 言語問題

ハイダ語は、他の北西海岸先住民の諸言語と同様に消滅の危機に瀕している (Krauss 1973)。ハイダ語の研究成果 (Enrico 1980; Hori 1998, 2008, 2016; Levine 1977; 堀 1996, 2001, 2011, 2013, 2017, 2019, 2020, 2021) を活用することや研究者の力を借りることによって、ハイダ人はハイダ語を復活させようと努力している (Breinig 2006)。北アメリカ先住民にとって母語の復興や保全はアイデンティティの維持に関わる重要な課題である (White 2006)。

ハイダ人としてのアイデンティティに関わるハイダ語の保全と継承の促進は、現在のハイダ人にとって最大の関心事のひとつである。ハイダ語の流暢な話者は40人にも満たないが、古老は地元の小・中学校や言語センターでハイダ語を教えたりすることによって、ハイダ語を後世に残そうと努力している。ジャスクアン (Jusquan, Amanda Bedad) とジスガング (Jisgang, Nika Collison) は、スキドゲイトのハイダ・グワイ博物館において7年以上を準備に費やしたハイダ語に関する展示「われわれをハイダ人たらしめるもの—ハイダ語 (That Which Makes Us Haida; the Haida Language)」をビル・リード・ギャラリー (バンクーバー, 2012年3月29日～9月2日) において開催するとともに、展示と同名の図録を出版した (Steedman and Collison eds. 2011)。同書は、ハイダ語の3方言 (アラスカ, オールド・マセット, スキドゲイト) の話者とのインタビュー、ハイダ人の歌と踊り、ハイダ語の演劇についてハイダ人の視点から記述している。彼女らは、本書を通して言語とは何か、ハイダ人にとってハイダ語はいかなる意味をもつか、そしてなぜハイダ人はハイダ語を保持し続けようとするのかを私たちに伝えようとしている。ハイダ語の継承をテーマとする本書は、ハイダ人の学芸員・研究者が中心となって企画・編集し、出版した点に大きな意義がある。

現在、ハイダ人は、ハイダ語を復興させるために、ハイダ人の伝統的な話を劇 (ドラマ) にし、演劇や映画においてハイダ語で演じることを行っている。F. ホワイト (White 2020) は、ハイダ人の男性が「ガーギード (野人)」に変貌すると言う内容の映画『ナイフの刃 (Edge of the Knife)』を事例として紹介し、この試みは言葉を復興させるだけでなく、ハイダ語の2方言の記録となっていると指摘している。また、地元の先住民コミュニティが運営する観光の中で母語を活用することによって母語の維持・活性化を試みる実践について、ニュージーランドのマオリ民族の事例とカナダのハイダ民族の事例

を比較した研究がある (Whitney-Squire 2014)。ホイットニー＝スクワイアー (Whitney-Squire 2016) はアイデンティティや場所・大地に深く関係する言語と観光との関係についてハイダ・グワイを事例として検証している。いずれの研究もコミュニティに基盤を置いた観光を実現する上での現地語の重要性を主張している。

## 7.5 アート

1930年ごろまでハイダ社会では、儀礼や日常生活にかかわるものとしてトーテムポールやカヌー、木箱、仮面、ガラガラ、食器、スプーンなどが制作されていた (Holm 2017; Townsend-Gaulet 1994)。また、欧米人來訪者の土産物としてアージライト製彫刻品や銀製ジュエリーも制作されていた。それらの出来栄は工芸品というよりもアートと呼んでよいものが多かった (Jacknis 2002; Lopes 2007; Gessler 1971)。現代社会を生きるハイダ人をはじめとする北西海岸先住民にとって儀礼具やアート作品の制作はアイデンティティの維持の源泉や主要な現金収入源となっている (Duffek 1983; Holmberg 2015; Spellberg 2020; 立川・森 2017)。特にハイダ民族はチャールズ・イーデンショー (Charles Edenshaw)、ビル・リード (Bill Reid)、ロバート・デイヴィッドソン (Robert Davidson) らの優れたアーティストを輩出したことで知られている。最近では、ハイダ・マンガの創始者であるマイケル・ニコル・ヤグラナース (Michael Nicoll Yahgulanaas) の作品がハイブリッドなハイダ・アートとして注目を集めている。

マクドナルド (MacDonald 1996) はカナダ文明博物館<sup>3)</sup>が収蔵していた仮面やパイプ、ガラガラ、その他の儀礼具の写真 (カラー90枚、白黒95枚) を掲載した著作において、それらのモノをハイダの歴史や文化、世界観と関連させながら紹介している。ハイダ・アートの特徴のひとつにアージライト石製彫刻品がある (Sheehan 2008)。コフマン (Kaufmann 1969; 2021 [1978]) は、1820年から1910年にかけてのアージライト石製彫刻品の変化や機能的側面に関する研究を行った。バーボウ (Barbeau 1953; 1957) は、アージライト石製彫刻品上に描き出されているハイダ民族の神話を検討するとともに、作り手の彫刻家に関する研究を行っている。フィッティングトン (Whittington 1989) は、アージライト石製彫刻品に表象されている説話、特にクマと母親をテーマとした説話の考察を行っている。ハイダ人は19世紀から販売用にアージライト石製彫刻品を作り続けてきた。しかし現在、いくつかの会社が合成物質を用いて、見た目や手触りが本物のようなアージライト製彫刻品の模造品を作っている。このホンモノそっくりの模造品は、象徴的に、社会的に、経済的に、そして文化的に価値ある物質を連想させるため、プラスチック製トーテムポールとは違った価値を獲得しているとロス (Roth 2015) は指摘している。

ハイダ人のアーティストにはチャールズ・イーデンショー (Charles Edenshaw) やビル・リード (Bill Reid) らがいる。ホルム (Holm 1981) は、チャールズ・イーデン

ショー (Charles Edenshaw) と彼の作品について論じている。ブラックマン (Blackman 1992) は、ハイダ・グワイのオールド・マセット村を拠点にかご細工とボタン・ブランケットを作った女流アーティストであるフローレンス・イーデンショー＝デイヴィッドソン (Florence Edenshaw Davidson) の民族誌的伝記を出版している。ケニー (Kenny 2012) は、ハイダのアーティストであり、政治的なリーダーであったスキレイ (Skilay) すなわちエリン・コリソン (Erine Collison) に関する伝記を刊行している。その他、ビル・リードの作品や人物について紹介する著作が複数出版されている (Bringhurst and Steltzer 1992; Duff and Townsend-Gault eds. 2004)。なかでもマーティノウ (Martineau 2001) は、プラット (Pratt) のオートエスノグラフィー (autoethnography) の理論を用いて、「ハイダの精神」や「ワタリガラスと最初の人間」といった記念碑的彫刻作品を制作したビル・リードの作品の文化的インパクトについて考察している。

ハイダ・アートではビル・リードやロバート・デイヴィッドソンらが制作したオーセンティックなトーテムポールやカヌー、木箱、仮面、版画などの作品が有名であるが、近年、注目されているのは、ハイダ・マンガやハイブリッド・アートなどの新たなアート作品である。新たなアート作品の第1人者は、マイケル・ニコル・ヤグラナース (Michael Nicoll Yahgulanaas) である。彼の作品は、歴史的記憶、葛藤、戦争、格差、文化的差異、資源開発、アイデンティティ、気候変動のような環境問題など多様な問題をテーマとしている。また、ハイダ・アートの伝統を重んじる彼は、独自のスタイルとしてフォームラインを重視する北西海岸先住民アート技法に、日本の漫画やアメリカのコミック、中国書道の技法を取り入れて、ハイダ・マンガという新しいジャンルを作り出した。さらに、彼は、車のパーツを利用した現代の銅板紋章や巨大なインスタレーション作品などを制作している。ヤグラナースのハイダ・マンガやそれ以外の作品を考察した研究がいくつかある (たとえば、Colclough IV 2012; Levell 2013a, 2013b)。レヴェル (Levell 2016) は、ヤグラナースのアートを紹介するとともに、彼のアートの特徴であるハイブリッド性、彼の哲学的背景や思想を紹介し、検討した著作を出版している。ヤグラナースは、文化財の所有権や先住権の侵害に対する異議申し立てのために2007年にアート作品「Haida Manga Coppers from the Hood」を制作し、プリティッシュ・コロンビア大学の人類学博物館で展示した。レヴェル (Levell 2013a) は、その展示の分析を通してモノとパフォーマンスな表現を通して博物館は「意見の場 (site of persuasion)」として理解し得ると主張した。

ヤグラナースは、ハイダの伝統アートと日本のマンガ、欧米のコミックを融合し、新たなジャンルであるハイダ・マンガを創り出した。スパイヤーズ (Spiers 2014) は、ヤグラナースのハイダ・マンガ『レッド』を分析し、それにはハイダ・アートの規則が適用されていること、ハイダ文化とアート伝統への敬意が示されていること、ハイダ文化の中心的な考え方であるアートや生活におけるバランスの重要性を示していることを指

摘した。ハリソン (Harrison 2016) は、ヤグラナースのハイダ・マンガをハイダの伝統的な視覚的表象と日本のマンガの動態を混ぜ合わせたアートであり、ハイダ・マンガを歴史や哲学、政治性に富む複雑なヴィジュアル的・ナラティブ的なアート形態であると指摘している。ヤグラナースは、『レッド』において文化的な暴力と生態学的な暴力を描き出しているが、ピアソン (Pearson 2019) は、『レッド』を事例としていかに暴力が暴力を増殖させるかについて分析している。彼女は、社会・生態的エージェンシーが相互に関係しあっていることを示しつつ、支配と戦争の人間中心主義的構造を提示して見せた。

ハイダ・アートを精神分析学の手法を用いて分析した研究がある。ヘッドマン (Hedman 2018) は精神分析学の視点から、ハイダ民族のシャーマンのコスモロジーと半族制度は人間の精神 (プシケ) における区分と並行関係にある、同様に「ワシと巨大な貝」の神話はその神話の逆転 (peripeteia) と溶解 (lysis) を示していると主張している。

携帯電話のラインアプリなどでやり取りする絵文字は、ユニコード (Unicode) の絵文字が多く使われるようになり、日本起源であることからエモジ (Emoji) と呼ばれるようになった。ハイダ・アーティストの中にエモジの開発を行う者が出てきた。J. イーデンショー (Edenshaw 2020) は、共同開発者のジェフ・ホーナー (Geoff Horner) とともにハイダ人用エモジの開発に取り組んでおり、儀礼用マントの上に描かれている伝統的なデザインを参考に幸せや悲しさ、フラストレーションを示すエモジを、創り出していることを紹介している。

カナダ人画家のエミリー・カー (Emily Carr) は、先住民出身ではないが、ハイダ・グワイをはじめとするカナダ西海岸の大自然を絵画として描いたことで知られている。モレイ (Moray 1998) は、北西海岸先住民の集落やトーテムポールを記録に残したエミリー・カーの作品を分析し、カーが自然 (wilderness) を強調する一方で、先住民の存在を消し去る同化・人種主義的な一面と先住民と彼らの文化に対して共感を示す別の一面をあわせ持っていたと指摘する。その上で、先住民文化が変化していくことに反対したカーの態度は、先住民の伝統に敬意を持っていたことを表していると主張する。

## 7.6 観光

ハイダ・グワイでは伐採業や漁業などが不振になるに従い、自然環境の持続可能な観光業に経済的に依存するようになった。ハイダ・グワイの南側半分にはグワイ・ハーナス国立公園と世界文化遺産があり (山越 2003b)、観光業は現在のハイダ社会において重要な産業のひとつとなっている。このため先住民が参画している観光業に関する研究が行われている (McVetty and Deakin 1997; Whinety-Squire 2014; Zorilla 2000; 足立 2016)。

先住民言語が世界各地と同様にハイダ・グワイでも急速に失われつつある。ホイット

ニー＝スクワイアー (Whitney-Squire 2016) は、アイデンティティや場所・大地に深く関係する言語と観光との関係についてハイダ・グワイを事例として検証している。コミュニティに基盤を置いた観光を行う上で現地語を使用することの重要性を主張している。観光業には予想外の社会的影響を生み出すことがあるが、ロジャーズ (Rogers 2002) は、観光業の社会への諸影響について調査を行っている。

## 7.7 教育

現代社会を生きる先住民にとって、経済的に成功するためには教育は重要な役割を果たす。ブリティッシュ・コロンビア州では先住民の生徒の高校での出席率や数学の成績(評価点)が非常に低い。ニール (Neel 2008) は、ハイダ・グワイの村では日常生活における算数や数学の必要性に基づき、算数に興味を持たせるためのカリキュラムを作り、そして高校数学の授業において先住民の生徒の出席率を高めかつ成績を上げるための学習方法について調査している。

1884年にカナダ政府はインディアン法を改正し、1885年よりポトラッチ儀礼などの実施を禁止した。これはカナダ政府の同化施策の一端であったが、この禁止令が解除されるまでハイダ人の古老は儀礼の知識を保持し続けた。1969年には、ハイダ・グワイで約80年ぶりにポトラッチ儀礼が開催され、ロバート・デイヴィッドソンが制作したトーテムポールが立てられた。それ以降、ハイダ人は失われかけていた知識を古老から掘り起こそうと努力してきた。デイヴィッドソンの実践から多くのことを学んだ彼の娘のセラ・フローレンス・デイヴィッドソン (Sara Florence Davidson) は教育者となり、ハイダ民族の伝統は全体論的であり、関係性の上に作られ、実践的かつ連続的であるという特徴があり、これらを現在の教育に取り入れようと考えている (Davidson and Davidson 2018)。

また、ハイダ・グワイの大自然の保全を基に環境教育のモデルを構築する試みがある。ザンドヴィリエットとブラウン (Zandvliet and Brown 2006) は、ハイダ・グワイを対象とした生態学的枠組みを利用した環境教育について報告し、検討を加えている。また、ハイダ人とハイダ人以外の人びとが協働してハイダ・グワイ博物館を活用した教育プログラムの開発も行った。ベアード (Baird 2011) は、一般の博物館において先住民の知識に関する教育プログラムを展開する場合は、先住民と非先住民との間に尊敬関係があることが必要不可欠であると指摘する。

ハイダ・グワイでは、地元のハイダ文化遺産センター (ハイダ・グワイ博物館) が社会・文化的に重要な役割を果たしている。スミス (Smith 2012) は、スキドゲイト村のハイダ人が、文化的虐殺の歴史を乗り越えるためにハイダ文化遺産センターにおいて、伝統文化の教育や表象化を道具として利用しながら、いかにさまざまな社会関係を維持し、知識を守りかつ創出しているかを検証している。

## 8 結語—ハイダ研究の動向と課題

20世紀初めから1970年代にかけてのハイダ文化に関する研究は、民族誌的研究と社会・文化変化の研究が主流であった。1970年代以降はオーソドックスな民族誌的研究が少なくなり、先住民権や土地権、自治などの政治問題、遺骨・文化財の返還問題、環境保護や国立公園、環境・資源管理などの生態的環境をめぐる問題、言語の復興・保全問題、アート、観光、教育など多様な現代的テーマが研究されるようになった。また、遺伝子分析の発達などにより考古学的遺跡から出土した遺骨などからDNAを抽出し、分析することが可能となったために、その成果と考古学や言語学の成果とを総合して、北アメリカ北西海岸地域への人間の移動についてより深い理解が可能となってきた。

現在では研究方法もテーマの多様化に連動して民族学・文化人類学中心から、政治学、法学、言語学、生態学、博物館研究、アート研究、観光学、教育学、考古学、生物学などの多様な研究方法が加わった。資源・環境管理の分野では、政治学者、法学者、文化人類学者、生態学者、生物学者らが学際的研究も行うようになってきた。

文化人類学においては、かつての中心的なテーマであった家族や親族、神話等はあまり研究されなくなっている。その一方で、ハイダ人が直面している資源管理や教育、観光などに係わる諸問題を解決・改善したいという強い要望があるため、問題解決に寄与する研究が増加している。これらの研究課題は、現地コミュニティから調査許可を得やすいことも増加の要因のひとつである。また、アート分野の研究も伝統的な儀礼具や伝統志向のアート作品からハイダ・マンガのようなハイブリッドなアートに関する研究に関心の中心が移行してきたと言えよう。このようにハイダ文化研究には大きな変化が見られた。

興味深いのは、大半の文化人類学的調査はオールド・マセットで行われており、スキドゲイトでの調査研究は少ない傾向がある。これは、文化人類学者が伝統志向のより強いコミュニティを好んで調査を実施する傾向があるからであると考えられる。私は、現代のハイダ文化の多様性を把握するためにもスキドゲイトでも文化人類学的調査を実施することが必要であると考えられる。

現代のハイダ文化に関する研究についてはワイスの民族誌的研究があるものの、彼は事実関係の記述に終始しており、家族関係や親族関係、クラン制度が経済活動や儀礼活動の組織化と実施にいかに関係しながら作動しているかといった点が十分に解明されていない。家族関係や親族関係、クラン制度の調査研究は、プライバシーが深く関わるためコミュニティから調査許可を得るのが難しい可能性が高いが、現代のハイダ文化やハイダ社会を理解するためには不可欠と言えるだろう。

社会や文化は常に変化し続けている。このためハイダ民族の社会・文化変化の記録化と分析は重要な研究課題のひとつである。ハイダ・グワイにおけるハイダ人の社会・文

化変化の解明のみならず、ハイダ・グワイを離れ、バンクーバーやビクトリアに移住したハイダ人の日常生活や儀礼活動、出身地の家族との関係や相互行為の内容なども調査すべきであると考ええる。

現代のハイダ・コミュニティで民族誌的・文化人類学的調査を実施するためには、ハイダ・コミュニティやハイダ・グワイ博物館などハイダ関連団体に調査研究の学術的・実践的重要性を理解してもらうことが不可欠である。その上で、ハイダ人を対等な調査パートナーとして協働して調査を実施することが重要である。また、テーマによっては先住民の調査者が中心となり、外部の研究者が彼らを補助するような協働研究 (collaborative research) も増加すると考える。

## 謝辞

本論文は、2021年度民博共同研究「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究——人類史的視点から」と2021年度科学研究費補助金・基盤研究 (A)「北米アラスカ・北西海岸地域における先住民文化の生成と現状、未来に関する比較研究」(JP19H00565)の研究成果の一部である。記して国立民族学博物館および日本学術振興会に感謝の微意を表す次第である。本論文の草稿について国立民族学博物館外来研究員の中村真里絵氏からコメント等を頂戴し、改稿の参考にさせて頂いた。お礼を申し上げたい。

## 注

- 1) アメリカ合衆国の国勢調査では、トリンギット=ハイダ人として統計が取られているため、アラスカのハイダ人の正確な人口は不明である。2010年の国勢調査によると、トリンギット=ハイダ人の総人口は26,080人であり、アラスカではユピック人 (34,000人)、イヌピアット人 (33,000人) に次ぐ人口規模である (Norris, Vines, and Hoeffel 2012: 17)。
- 2) 現在のリザーブはオールド・マセット (Old Massett) と呼ばれている。現在のマセット (Masset) はリザーブから5キロメートルほど離れた所に位置しており、先住民と非先住民の混住地であるが、非先住民の町である。
- 3) 現在の名称は、カナダ歴史博物館 (Canadian Museum of History) である。

## 参考文献

<和文>

足立照也

- 2016 「北西太平洋岸先住民社会における先住民ツーリズムに関する研究ノート——文化力の観光活用」『阪南論集 社会科学編』51(3): 105-122。

大岩圭之介

- 1998 「ハイダ民族における文化「再生」へのストラテジー——観光、アート、環境保護運動」『研究所年報』（明治学院大学国際学部附属研究所）1: 81-83。

奥田郁夫

- 2018a 「南東アラスカ先住民コミュニティ・ハイダバーグHydaburgの現状と今後の課題」『芸術工学への誘い』23: 3-16。  
2018b 『南東アラスカ先住民の暮らしと生態系の保全』東京：農林統計協会。

菊池徹夫・熊林佑充・佐藤宏之・高橋龍三郎

- 2005 「クイーン・シャーロット諸島における民族考古学的研究——北米西海岸インディアンの民族誌調査」『史観』150: 97-120。

岸上伸啓

- 2020 「北西海岸先住民」信田敏宏編『先住民の宝』pp.107-122, 大阪：国立民族学博物館。  
2021a 「カナダ先住民の疫病との戦い——北西海岸地域のハイダと極北地域のイヌイト」秋道智彌・角南篤編『疫病と海』（海とヒトの関係学④）pp.61-74, 大阪：西日本出版社。  
2021b 「北アメリカ北西海岸先住民と生き物の不思議な関係——ワタリガラスを中心に」『ビオストーリー』35: 20-24。

桑原牧子

- 2010 「ハイダとタヒチの文化復興とイレズミの復活」『民俗と風俗』20: 115-135。

小林天心

- 2014 「ハイダ・グワイの陸と海——世界遺産グワイ・ハーナス国立公園に行く」『ホスピタリティ・マネジメント』5 (1): 17-44。

立川陽仁

- 1999a 「ポトラッチ研究史と将来の展望」『社会人類学年報』25: 167-185。  
1999b 「クワクワカクク貴族層の衰退——カナダ植民地統治期における世界観とポトラッチの変容」『民族学研究』64(1): 1-22。  
2016 「ポトラッチとは、ポトラッチにおける贈与とは」岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』pp.72-91, 京都：臨川書店。

立川陽仁・森彩也香

- 2017 「モニュメントからアートへ——トーテム・ポールとイヌクシュクの例から」『人文論叢』（三重大学）34: 35-48。

辻信一

- 1998 「ハイダの森から文化が甦るカナダ先住民族の環境——文化再生運動」『金曜日』6 (31): 38-41。

堀博文

- 1996 「ハイダ語スキドゲイト方言におけるピッチ付与規則」『言語研究』110: 28-51。  
2001 「ハイダ語（北米インディアン諸語）の声調について」（特集 1 世界の声調・アクセント言語）『音声研究』5 (1): 28-36。  
2011 「ハイダ語の手段接頭辞について」『北方言語研究』1: 1-22。  
2013 「危機言語にみる変異と変化——ハイダ語（北米先住民諸語）の場合」『明海日本語』（18）: 75-97。  
2017 「ハイダ語の類別接頭辞と名詞類別」『人文論集——静岡大学人文社会科学部社会学科・言語文化科学研究報告』67(2): 159-185。

- 2019 「ハイダ語の動詞接尾辞 -gaa について」『静言論叢』2: 71-91。  
 2020 「ハイダ語における『語』—音韻面と形態面から」『静言論叢』3: 17-46。  
 2021 「ハイダ語の複文構造—従属節の分類に関する試論」『静言論叢』4: 1-13。

山越邦夫

- 2003a 「カナダ先住民ハイダ族の神話世界—トーテムの契約」『立教大学ランゲージセンター紀要』8: 77-98。  
 2003b 「ハイダ・グワイ風景論」『立教大学ランゲージセンター紀要』7: 39-55。

#### < 欧文 >

Acheson, S. R.

- 1995 In the Wake of the Iron People: A Case for Changing Settlement Strategies among the Kunghit Haida. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 1(2): 273-299.

Allen, R. A.

- 1954 Patterns of Preferential Marriage among the Alaskan Haidas. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 2(2): 195-201.  
 1955 Changing Social Organization and Kinship among the Alaskan Haidas. *Anthropological Papers of the University of Alaska* 4(1): 5-11.

Ancheta, M.

- 2019 Reveling Blue on the Northern Northwest Coast. *American Indian Culture and Research Journal* 43(1): 1-30.

Astooroff, N. K.

- 2008 Evaluating Collaborative Planning: A Case Study of the Haida Gwaii Land and Resource Management Plan. Ph.D. Thesis, School of Resource and Environmental Management, Simon Fraser University.

Baird, J. R.

- 2011 Landed Wisdoms: Collaborating on Museum Education Programmes with the Haida Gwaii Museum at Kaay Lnagaay. Ph.D. Thesis, Department of Curriculum and Pedagogy, Faculty of Education, University of British Columbia.

Barbeau, C. M.

- 1950 *Totem Poles* (Anthropological Series 30, National Museum of Canada Bulletin 119), 2 Vols. Ottawa: National Museum of Man.  
 1953 *Haida Myths Illustrated in Argillite Carvings* (Anthropological Series 32, National Museum of Canada Bulletin 127). Ottawa: National Museum of Man.  
 1957 *Haida Carvers in Argillite* (Anthropological Series 38, National Museum of Canada Bulletin 139). Ottawa: National Museum of Man.

Blackman, M. B.

- 1973a The Northern and Kaigani Haida: A Study in Photographic Ethnohistory. Ph.D. Thesis, Department of Anthropology, The Ohio State University.  
 1973b Totems to Tombstones: Culture Change as Viewed through the Haida Mortuary Complex, 1877-1971. *Ethnology* 12(1): 47-56.  
 1976 Creativity in Acculturation: Art, Architecture and Ceremony from the Northwest Coast. *Ethnohistory* 23(4): 387-413.

- 1977 Ethnohistoric Changes in the Haida Potlatch Complex. *Arctic Anthropology* 14(1): 39-53.
- 1981 *Windows on the Past: The Photographic Ethnohistory of the Northern and Kaigani Haida* (National Museum of Man Mercury Series. Ethnology Service Papers 74). Ottawa: National Museum of Man.
- 1990 Haida: Traditional Culture. In W. Suttles (ed.) *Handbook of the North American Indian, Volume 7, Northwest Coast*, pp. 240-260. Washington DC: Smithsonian Institution.
- 1992 *During My Time: Florence Edenshaw Davidson, A Haida Woman*. Revised Edition. Seattle: University of Washington Press and Vancouver: Douglas and McIntyre.
- Boas, F.
- 1890 First General Report on the Indians of British Columbia. *59th Report of the British Association for the Advancement of Science for 1889*, pp. 801-855. London: The British Association for the Advancement of Science.
- Boelscher, M.
- 1985 The Curtain Within: The Management of Social and Symbolic Classification among the Masset Haida. Ph.D. Dissertation in Anthropology, Simon Fraser University, Burnaby, BC.
- 1988 *The Curtain Within: Haida Social and Mythical Discourse*. Vancouver: UBC Press.
- Boelscher-Ignace, M.
- 1991 Haida Public Discourse and Its Social Context. *The Canadian Journal of Native Studies* XI (1): 113-135.
- Boyd, R.
- 1999 *The Coming of the Spirit of Pestilence: Introduced Infectious Diseases and Population Decline among Northwest Coast Indians, 1774-1874*. Seattle: University of Washington Press.
- Breinig, J.
- 2006 Alaska Haida Stories of Language Growth and Regeneration. *American Indian Quarterly* 30(1/2): 110-118.
- Bringhurst, R. and U. Steltzer
- 1992 *The Black Canoe: Bill Reid and the Spirit of Haida Gwaii*. 2nd Edition. Vancouver: Douglas and McIntyre.
- Buck, H. J.
- 2014 Village Science Meets Global Discourse: The Haida Salmon Restoration Corporation's Ocean Iron Fertilisation Experiment (Case Study). *Geoengineering Our Climate?: A Working Paper Series on the Ethics, Politics and Governance of Climate Engineering*. <http://wp.me/p2zsRk-9M> (accessed September 20, 2021)
- 2018 Village Science Meets Global Discourse: The Haida Salmon Restoration Corporation's Ocean Iron Fertilisation Experiment. In J. Blackstock and S. Low (eds.) *Geoengineering Our Climate?: Ethics, Politics, and Governance*, pp. 107-112. London: Routledge.
- Christie, G.
- 2005 A Colonial Reading of Recent Jurisprudence: Sparrow, Delgamuukw and Haida Nation. *Windsor Yearbook Access to Justice* 23(1): 17-53.
- Colclough IV, W. B.
- 2012 Transforming Hybridities: Brendan Lee Satish Tang's Manga Ormolu and Michael Nicoll Yahgulanaas' Haida Manga. MA Thesis, Department of Art History, Concordia University,

- Montreal, Quebec, Canada.
- Collison, W. H.  
1915 *In the Wake of the War Canoe: A Stirring Record of Forty Years' Successful Labour, Peril and Adventure amongst the Savage Indian Tribes of the Pacific Coast, and the Piratical Head-Hunting Haida of the Queen Charlotte Islands, British Columbia*. London: Seeley, Service.
- Columbia, T. E.  
1999 Introduced Species Management in Haida Gwaii (Queen Charlotte Island). *Proceedings of a Conference on the Biology and Management of Species and Halibuts at Risk, Kamloops, BC 1*: 327-333.
- Conner, T. A.  
2003 Social Vulnerability and Adaptive Capacity to Climate Change Impacts: Identifying Attributes in Two Remote Coastal Communities on Haida Gwaii, British Columbia. MA Thesis, Department of Geography, University of Victoria.
- Crist, V.  
2012 Protecting Place Through Community Alliances: Haida Gwaii Responds to the Proposed Enbridge Northern Gateway Project. MA Thesis, Department of Anthropology, University of Victoria, BC, Canada.
- Cybulski, J. S.  
1973 The Gust Island Burial Shelter: Physical Anthropology. *Archaeological Survey Papers* (National Museum of Man Mercury Series) 9: 60-113.
- Davidson, S. F. and R. Davidson  
2018 *Potlatch and Pedagogy: Learning through Ceremony*. Winnipeg, MB: Portage and Main Press.
- Dawson, G. M.  
1880 Report on the Queen Charlotte Islands, 1878. *Geological Survey of Canada. Report of Progress for 1878-1879*, pp. 1B-239B. Montreal: Geological Survey of Canada.
- Deagle, G.  
1988 Traditional West Coast Native Medicine. *Canadian Family Physician* 34: 1577-1580.
- Dean, M.  
2009 "What They Are Doing to the Land They Are Doing to Us": Environmental Politics on Haida Gwaii. MA Thesis, Department of History, University of British Columbia.
- Duff, W.  
1964 *The Indian History of British Columbia. Vol. 1: The Impact of the White Man* (Anthropology in British Columbia. Memoirs 5). Victoria: British Columbia Provincial Museum.
- Duff, W. and M. Kew  
1958 Anthony Island: A Home of the Haidas. *British Columbia Provincial Museum of Natural History and Anthropology Report for the Year 1957*, pp. 37-64. Victoria: British Columbia Provincial Museum.
- Duff, K. and C. Townsend-Gault (eds.)  
2004 *Bill Reid and Beyond: Expanding on Modern Native Art*. Vancouver and Toronto: Douglas & McIntyre and Seattle: University of Washington Press.

- Duffek, K.  
 1983 "Authenticity" and the Contemporary Northwest Coast Indian Art Market. *BC Studies* 57: 99–111.
- Edenshaw, J.  
 2020 Haida Emoji. *BC Studies* 205: 7–9, 133.
- Edmonds, P.  
 2010 Unpacking Settler Colonialism's Urban Strategies: Indigenous Peoples in Victoria, British Columbia, and the Transition to a Settler-Colonial City. *Urban History Review/Revue d'Histoire Urbaine* 38(2): 4–20. <https://doi.org/10.7202/039671ar> (accessed October 1, 2021)
- Enrico, J. J.  
 1980 Masset Haida Phonology. Ph.D. Dissertation in Linguistics, University of California, Berkeley.  
 1996 *Northern Haida Songs*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Fedje, D. W. and T. Christensen  
 1999 Modeling Paleoshorelines and Locating Early Holocene Coastal Sites in Haida Gwaii. *American Antiquity* 64(4): 635–652.
- Fedje, D. W. and Q. Mackie  
 2005 Overview of Cultural History. In D. W. Fedje and R. W. Mathews (eds.) *Haida Gwaii: Human History and Environment from the Time of Loon to the Time of the Iron People*, pp. 154–162. Vancouver and Toronto: UBC Press.
- Fedje, D. W. and R. W. Mathews  
 2005 Conclusion: Synthesis of Environmental and Archaeological Data. In D. W. Fedje and R. W. Mathews (eds.) *Haida Gwaii: Human History and Environment from the Time of Loon to the Time of the Iron People*, pp. 372–375. Vancouver and Toronto: UBC Press.
- Fedje, D. W. and R. W. Mathews (eds.)  
 2005 *Haida Gwaii: Human History and Environment from the Time of Loon to the Time of the Iron People*. Vancouver and Toronto: UBC Press.
- Fladmark, K. R.  
 1973 The Richardson Ranch Site: A 19th Century Haida House. In R. M. Getty and K. R. Fladmark (eds.) *Historical Archeology in Northwestern North America*, pp. 53–95. Calgary, AB: University of Calgary Archaeological Association.
- Foustka, J.  
 2012 Land Claims of the Haida First Nation. Bachelor's Diploma Thesis, Department of English and American Studies, Faculty of Arts, Masaryk University.
- Galbraith, L.  
 2014 Making Space for Reconciliation in the Planning System. *Planning Theory and Practice* 15(4): 453–479.
- Gannon, K. E.  
 2016 '40 Million Salmon Might Be Wrong': Ecological Worldviews and Geoengineering Technologies: The Case of the Haida Salmon Restoration Corporation. Ph.D. Dissertation, King's College London.

- Gannon, K. E. and M. Hulme  
 2018 Geoengineering at the “Edge of the World”: Exploring Perceptions of Ocean Fertilisation through the Haida Salmon Restoration Corporation. *Geo: Geography and Environment* 5 (1): e00054.
- Gessler, T.  
 1971 A Stylistic Analysis of Twelve Haida Drawings. *Syesis* 4(1-2): 245-252.
- Gilani, H. R., J. L. Innes, and H. Kent  
 2018 Developing Human Well-being Domains, Metrics and Indicators in an Ecosystem-based Management Context in Haida Gwaii, British Columbia, Canada. *Society and Natural Resources* 31(12): 1321-1337.
- Gill, I.  
 2008 *All That We Say Is Ours: Guujaaw and the Reawakening of the Haida Nation*. Vancouver: Douglas and McIntyre.
- Gough, B. M.  
 1982 New Light on Haida Chiefship: The Case of Edenshaw 1850-1853. *Ethnohistory* 29(2): 131-139.
- Grek-Martin, J.  
 2017 Vanishing the Haida: George Dawson’s Ethnographic Vision and the Making of Settler Space on the Queen Charlotte Islands in the Late Nineteenth Century. *The Canadian Geographer* 51(3): 373-398.
- Hamilton, K. D.  
 2014 Haida Totem Pole: Reflections of a Society. Ph.D. Thesis, Department of History, Universidade NOVA de Lisboa, Lisbon, Portugal. <http://hdl.handle.net/10362/14275> (accessed September 30, 2021)
- Harris, C.  
 2017 *Raven’s Cry*. Seattle: University of Washington Press.
- Harris, D (Douglas). C.  
 2008 *Landing Native Fisheries: Indian Reserves and Fishing Rights in British Columbia, 1849-1925*. Vancouver: UBC Press.
- Harris, R. C (Cole).  
 2002 *Making Native Space: Colonialism, Resistance, and Reserve in British Columbia, 1849-1925*. Vancouver: UBC Press.
- Harrison, C (Charles).  
 1925 *Ancient Warriors of the North Pacific: The Haidas, Their Laws, Customs and Legends, with Some Historical Account of the Queen Charlotte Islands*. London: H. F. and G. Witherby.
- Harrison, R (Richard).  
 2016 Seeing and Nothingness: Michael Nicoll Yahgulanaas, Haida Manga, and a Critique of the Gutter. *Canadian Review of Comparative Literature* 43(1): 51-74.
- Hawkes, S.  
 1996 The Gwaii Haanas Agreement: From Conflict to Cooperation. *Environments* 23(2): 87-100.

- Hayward, P.  
 2012 The Constitution of Assemblages and the Aquapelagality of Haida Gwaii. *Shima: The International Journal of Research into Island Cultures* 6(2): 1-14.
- Hedman, B.  
 2018 Archetypal Images in Haida Art. *International Journal of Jungian Studies* 10(1): 16-33.
- Henderson, J. R.  
 1974 Missionary Influences on the Haida Settlement and Subsistence Patterns, 1876-1920. *Ethnohistory* 21(4): 303-316.
- Holm, B.  
 1981 Will the Real Charles Edenshaw Please Stand Up?: The Problem of Attribution in Northwest Coast Indian Art. In D. N. Abbott (ed.) *The World Is As Sharp As a Knife: An Anthology in Honour of Wilson Duff*, pp. 175-200. Victoria: British Columbia Provincial Museum.  
 2017 *Northwest Coast Indian Art: An Analysis of Form*. Seattle: University of Washington Press.
- Holmberg, S. M.  
 2015 Reviving Ancient Cultures: Contemporary Northwest Coast Artists Breathe New Life into Totemic Symbols. *Sculpture Review* 64(4): 8-13.
- Hori, H.  
 1998 Pitch in Skidegate Haida: A Reply to Enrico. *Gengo Kenkyu (Journal of the Linguistic Society of Japan)* 114: 121-126.  
 2008 Semantic Motivations for Split Intransitivity in Haida. *Gengo Kenkyu (Journal of the Linguistic Society of Japan)* 134: 23-55.  
 2016 Polysynthesis. *Linguistic Typology of the North* 3: 23-58.
- Horton, H. H.  
 1981 Plant Use in Kaigani Haida Culture: Correction of an Ethnohistorical Oversight. *Economic Botany* 35: 434-449.
- Horton, Z.  
 2017 Going Rouge or Becoming Salmon?: Geoengineering Narratives in Haida Gwaii. *Cultural Critique* 97: 128-166.
- Houde, N.  
 2007 The Six Faces of Traditional Ecological Knowledge: Challenges and Opportunities for Canadian Co-Management Arrangements. *Ecology and Society* 12(2): 34. <http://www.ecologyandsociety.org/vol12/iss2/art34/> (accessed September 10, 2021)
- Jacknis, I.  
 2002 Towards an Art History of Northwest Coast First Nations Part 1. *BC Studies* 135: 47-53.
- Jones, R.  
 2007 Application of Haida Oral History to Pacific Herring Management. In N. Haggan, B. Neis, and I. G. Baird (eds.) *Fishers' Knowledge in Fisheries Science and Management* (Coastal Management Source Books 4), pp. 75-89, Paris: UNESCO Publishing.
- Jones, R., C. Rigg, and L. Lee  
 2010 Haida Marine Planning: First Nations as a Partner in Marine Conservation. *Ecology and Society* 15(1): 12. <http://www.ecologyandsociety.org/vol15/iss1/art12/> (accessed October 1, 2021)

- Jones, R., C. Rigg, and E. Pinkerton  
 2017 Strategies for Assertion of Conservation and Local Management Rights: A Haida Gwaii Herring Story. *Marine Policy* 80(June): 154-167.
- Kaufmann, C. N.  
 1969 Changes in Haida Indian Argillite Carvings, 1820 to 1910. Ph.D. Dissertation in Art History, University of California, Los Angeles.  
 2021[1978] Functional Aspects of Haida Argillite Carvings. In N. H. H. Graburn (ed.) *Ethnic and Tourist Arts: Cultural Expressions from the Fourth World*, pp. 56-69. Berkeley: University of California Press. <https://doi.org/10.1525/9780520316775-007> (accessed October 1, 2021)
- Keller, R.  
 1990 Haida Indian Land Claims and South Moresby National Park. *American Review of Canadian Studies* 20(1): 7-30.
- Kenny, C.  
 2012 Skilay: Portrait of a Haida Artist and Leader. In C. Kenny and T. N. Fraser (eds.) *Living Indigenous Leadership: Native Narratives on Building Strong Communities*, pp. 84-99. Vancouver: UBC Press.
- Kii7iljuus (B. J. Wilson) and H. Harris  
 2005 Tllsda Xaaydas K'aaygang.nga: Long, Long Ago Haida Ancient Stories. In D. W. Fedje and R. W. Mathews (eds.) *Haida Gwaii: Human History and Environment from the Time of Loon to the Time of the Iron People*, pp. 121-139. Vancouver and Toronto: UBC Press.
- Klippenstein, N. L.  
 1991 The Haida Struggle for Autonomy on the Haida Gwaii, 1966-1990. MA Thesis, Department of Anthropology, University of Manitoba.
- Knight, R.  
 1978 *Indians at Work: An Informal History of Native Labour in British Columbia, 1848-1930*. Vancouver: New Star Books.
- Krauss, M. E.  
 1973 Na-Dene. In T. A. Sebeok (ed.) *Current Trends in Linguistics*, Vol. 10, pp. 903-978. The Hague and Paris: Mouton.
- Kristensen, T. J. and R. Davis  
 2015 The Legacies of Indigenous History in Archaeological Thought. *Journal of Archaeological Method and Theory* 22: 512-542.
- Krpmotich, C.  
 2011 Repatriation and the Generation of Material Culture. *Mortality* 16(2): 145-160.  
 2014 *The Force of Family: Repatriation, Kinship, and Memory on Haida Gwaii*. Toronto: University of Toronto Press.
- Krpmotich, C. and L. Peers  
 2011 The Scholar-Practitioner Expanded: An Indigenous and Museum Research Network. *Museum Management and Curatorship* 26(5): 421-440.  
 2013 *This is Our Life: Haida Material Heritage and Changing Museum Practice*. Vancouver: UBC Press.

- Lam, M. E.
- 2015 Reconciling Haida Ethics with Pacific Herring Management. In D. E. Dumitras, I. M. Jitea, and S. Aerts (eds.) *Know Your Food: Food Ethics and Innovation*, pp. 169–175. Wageningen: Wageningen Academic Publishers.
- Langdon, S.
- 1979 Comparative Tlingit and Haida Adaptation to the West Coast of the Prince of Wales Archipelago. *Ethnology* 18(2): 101–119.
- Langdon, S., R. Prosper, and N. Gagnon
- 2010 Two Paths One Direction: Parks Canada and Aboriginal Peoples Working Together. *The George Wright Forum* 27(2): 222–233.
- Lee, L. C. et al.
- 2021 Chiixuu Tll Inasdll: Indigenous Ethics and Values Lead to Ecological Restoration for People and Place in Gwaii Haanas. *Ecological Restoration* 39(1–2): 45–51. doi:10.3368/er.39.1–2.45
- Lepofsky, D. and M. Caldwell
- 2013 Indigenous Marine Resource Management on the Northwest Coast of North America. *Ecological Processes* 2(1): 12. doi:10.1186/2192-1709-2-12
- Lesnek, A. J. et al.
- 2018 Deglaciation of the Pacific Coastal Corridor Directly Preceded the Human Colonization of the Americas. *Science Advances* 4(5): eaar5040. doi:10.1126/sciadv.aar5040
- Levell, N.
- 2013a Site-specificity and Dislocation: Michael Nicoll Yahgulanaas and His Haida Manga Meddling. *Journal of Material Culture* 18(2): 93–116.
- 2013b Coppers from the Hood: Haida Manga Interventions and Performative Acts. *Museum Anthropology* 36(2): 113–127.
- 2016 *The Seriousness of Play: The Art of Michael Nicoll Yahgulanaas*. London: Black Dog Publishing.
- Levine, R. D.
- 1977 The Skidegate Dialect of Haida. Ph.D. Dissertation in Linguistics, Columbia University, New York.
- Lincoln, C.
- 2018 Sustainable Indigenous Land Management in Canada: A Model Inspired by Lessons from Barriere Lake and Haida Gwaii. Ph.D. Dissertation, University of Ottawa, Canada.
- Lindo, J. et al.
- 2017 Ancient Individuals from the North American Northwest Coast Reveal 10,000 Years of Regional Genetic Continuity. *PNAS (Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America)* 114(16): 4093–4098. <https://doi.org/10.1073/pnas.1620410114> (accessed October 11, 2021)
- Lopes, D. M.
- 2007 Art without Art. *The British Journal of Aesthetics* 47(1): 1–15.
- Loring, P. A. and M. S. Hinzman
- 2018 “They’re All Really Important, But ...”: Unpacking How People Prioritize Values for the

- Marine Environment in Haida Gwaii, British Columbia. *Ecological Economics* 152: 367-377.
- MacDonald, G. F.
- 1973 Haida Burial Practices: Three Archaeological Examples. *Archaeological Survey Papers* (National Museum of Man Mercury Series) 9: 1-59.
- 1983 *Haida Monumental Art: Villages of the Queen Charlotte Islands*. Vancouver: University of British Columbia Press and Seattle: University of Washington Press.
- 1989 *Chiefs of the Sea and Sky: Haida Heritage Sites of the Queen Charlotte Islands*. Vancouver: UBC Press.
- 1996 *Haida Art*. Seattle: University of Washington Press.
- MacDonald, G. F. and J. S. Cybulski
- 1973 *Haida Burial Practices: Three Archaeological Examples/ The Gust Island Burial Shelter: Physical Anthropology*. Ottawa: University of Ottawa Press.
- Mackie, Q., D. Fedje, and D. McLaren
- 2018 Archaeology and Sea Level Change on the British Columbia Coast. *Canadian Journal of Archaeology* 42: 74-91.
- Martineau, J.
- 2001 Autoethnography and Material Culture: The Case of Bill Reid. *Biography* 24(1): 242-258.
- Mashiko, M.
- 2006 A Comparative Study of Raven Myths in the North Pacific Region. *Bulletin of Kanazawa Gakuin. University, Literature and Art* 4: 43-57.
- Mays, J.
- 2021 Haida Governance Strategies for Effective Ecosystem Based Management. MPA Thesis, The School of Public Administration, University of Victoria, BC, Canada.
- McGuire, M.
- 2019 Tli Yahda: Visions of a Haida Justice System. *International Journal of Critical Indigenous Studies* 12(2): 18-33.
- McVetty, D. and M. Deakin
- 1997 *Optimising the Outcomes of Tourism in Co-managed Protected Heritage Areas: The Cases of Akulavik National Park and Gwaii Haanas National Park Reserve/Haida Heritage Site*. Winnipeg: Parks Canada, Western Canada Service Office.
- Mooney, K. A.
- 1971 *A Preliminary Study of Haida Reciprocity and Redistribution: The Interaction of Ethnology and Archaeology*. Ann Arbor, MI: Department of Anthropology, University of Michigan.
- Moray, G.
- 1998 Wilderness, Modernity and Aboriginality in the Paintings of Emily Carr. *Journal of Canadian Studies* 33(2): 43-65.
- Moss, M. L.
- 1993 Shellfish, Gender, and Status on the Northwest Coast: Reconciling Archaeological, Ethnographic, and Ethnohistorical Records of the Tlingit. *American Anthropologist* 95(3): 631-652.
- 2007 Haida and Tlingit Use of Seabirds from the Forrester Islands, Southeast Alaska. *Journal*

- of Ethnobiology* 27(1): 28–45.
- 2008a Outer Coast Maritime Adaptations in Southern Southeast Alaska: Tlingit or Haida? *Arctic Anthropology* 45(1): 41–60.
- 2008b Islands Coming Out of Concealment: Traveling to Haida Gwaii on the Northwest Coast of North America. *The Journal of Island and Coastal Archaeology* 3(1): 35–53.
- Mullins, P. R. and R. Paynter
- 2000 Representing Colonizers: An Archaeology of Creolization, Ethnogenesis, and Indigenous Material Culture among the Haida. *Historical Archaeology* 34: 73–84.
- Murdock, G. P.
- 1934a The Haidas of British Columbia. In G. P. Murdock (ed.) *Our Primitive Contemporaries*, pp. 221–263. New York: MacMillan.
- 1934b Kinship and Social Behavior among the Haida. *American Anthropologist* 36(3): 355–385.
- 1936 Rank and Potlatch among the Haida. *Yale University Publications in Anthropology*, No. 13, pp. 1–20. New Haven: Yale University Press.
- Nang Kiing.aay7uuans (J. Young)
- 2005 Taadl, Nang Kilslaas, and Haida. In D. W. Fedje and R. W. Mathewes (eds.) *Haida Gwaii: Human History and Environment from the Time of Loon to the Time of the Iron People*, pp. 140–144. Vancouver and Toronto: UBC Press.
- Neel, K. I. S.
- 2008 Numeracy in Haida Gwaii, BC: Connecting Community, Pedagogy, and Epistemology. Ph.D. Thesis, Faculty of Education, Simon Fraser University.
- Niblack, A. P.
- 1890 The Coast Indians of Southern Alaska and Northern British Columbia. *Annual Report of the U. S. National Museum for 1888*, pp. 225–386. Washington DC: U. S. Government Printing Office.
- Norris, T., P. L. Vines, and E. M. Hoeffel
- 2012 *The American Indian and Alaska Native Population: 2010 Census Briefs*. Suitland, MD: U. S. Census Bureau.
- Olynyk, J. M.
- 2005 The Haida Nation and Taku River Tlingit Decisions: Clarifying Roles and Responsibilities for Aboriginal Consultation and Accommodation. *The Negotiator* (2005): 2–7. [https://www.lawsonlundell.com/media/news/236\\_Negotiatorarticle.pdf](https://www.lawsonlundell.com/media/news/236_Negotiatorarticle.pdf) (accessed October 15, 2021)
- Orchard, T. J.
- 2001 Environmental Archaeology in Gwaii Haanas. *CZ/ZC* 19: 2–8.
- 2007 Otters and Urchins: Continuity and Change in Haida Economy during the Late Holocene and Maritime Fur Trade Periods. Ph.D. Thesis, Department of Anthropology, University of Toronto.
- Orchard, T. J. and P. Szpak
- 2015 Zooarchaeological and Isotopic Insights into Locally Variable Economic Patterns: A Case Study from Late Holocene Sothern Haida Gwaii, British Columbia. *BC Studies* 187: 87–127.

- Orchard, T. J. and R. J. Wigen  
 2016 Halibut Use on the Northwest Coast of North America: Reconciling Ethnographic, Ethno-historic, and Archaeological Data. *Arctic Anthropology* 53(1): 37-57.
- Owings, A. C.  
 2019 Using Ancient DNA to Infer Impacts of European Colonization on First Nations Populations in Coastal British Columbia, Canada. Ph.D. Thesis, School of Integrative Biology, University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Pearson, L. A.  
 2019 Seeing (in) Red: 'Thick' Violence in Michael Nicoll Yahgulanaas's Red: A Haida Manga. In N. Michwitz, I. Horton, and I. Hague (eds.) *Representing Acts of Violence in Comics*, pp. 69-88. New York: Routledge.
- Penikett, T.  
 2012 Six Definitions of Aboriginal Self-government and the Unique Haida Model. A Paper prepared for the Action Canada Northern Conference, Haida Gwaii, September 2012.
- Porter-Bopp, S.  
 2006 Colonial Nature? Wilderness and Culture in Guwaa Haanas National Park Reserve and Haida Heritage Site. MA Thesis, Faculty of Environmental Studies, York University, Toronto, Canada.
- Pruner, J. F.  
 2005 Aboriginal Title and Extinguishment Not So "Clear and Plain": A Comparison of the Current Maori and Haida Experiences. *Pacific Rim Law and Policy* 14(1): 253-288.
- Quail, S.  
 2014 Yah'guudang: The Principle of Respect in the Haida Legal Tradition. *U. B. C. Law Review* 47: 673.
- Rogers, M. H.  
 2002 Totems and Tourists: Tourism and Cultural Production on Haida Gwaii/The Queen Charlotte Islands, British Columbia. Ph.D. Dissertation, Department of Anthropology. State University of New York at Albany.
- Rosman, A. and P. G. Rubel  
 1986 *Feasting with Mine Enemy: Rank and Exchange among Northwest Coast Societies*. Prospect Heights, IL: Waveland Press.
- Roth, S.  
 2015 Argillite, Faux-argillite and Black Plastic: The Political Economy of Simulating a Quintessential Haida Substance. *Journal of Material Culture* 23(3): 299-312.
- Schurr, T. G. et. al  
 2012 Clan, Language, and Migration History Has Shaped Genetic Diversity in Haida and Tlingit Populations from Southeast Alaska. *American Journal of Physical Anthropology* 148(3): 422-435.
- Shapcott, C.  
 1989 Environmental Impact Assessment and Resource Management, A Haida Case Study: Implications for Native People of the North. *The Canadian Journal of Native Studies* 9(1): 55-83.

- Sharp, A.  
 1997 What Is the Constitution of “The Spirit of Haida Gwaii”? Reflections of James Tully’s Strange Multiplicity: Constitutionalism in an Age of Diversity. *History and Anthropology* 10(2-3): 241-256.
- Sheehan, C.  
 2008 *Breathing Stone: Contemporary Haida Argillite Sculpture*. Calgary, AB: Frontenac House.
- Simpson, M.  
 2018 Museums and Restorative Justice: Heritage Repatriation and Cultural Education. *Museum International* 61(1-2): 121-129.
- Slattery, B.  
 2005 Aboriginal Rights and the Honour of the Crown. *Supreme Court Law Review* 29: 433-445.
- Sloan, N. A.  
 2003 Evidence of California-Area Abalone Shell in Haida Trade and Culture. *Canadian Journal of Archaeology* 27(2): 273-286.
- Smith, M.  
 2012 Mapping Kaay Llnagaay: Indigenous Cultural Visuality in Haida Gwaii, B. C. Ph.D. Thesis, Faculty of Education, University of British Columbia.
- Sparrow, K. B.  
 1998 Correcting the Record: Haida Oral Tradition in Anthropological Narratives. *Anthropologica* 40(2): 215-222.
- Spellberg, M.  
 2020 Art and Aliveness on the Northwest Coast. *Res: Anthropology and Aesthetics* 73(1): 203-220.
- Spencer, J.  
 2018 Orality, Literacy and the Translator: A Case Study in Haida Translation. *Translation Studies* 11(3): 298-314.
- Spiers, M. B.  
 2014 Creating a Haida Manga: The Formline of Social Responsibility in Red. *Studies in American Indian Literatures* 26(3): 41-61.
- St. George, R.  
 2012 Ethnographic Things: Objects and Subjects in Haida History. *Ethnologies* 34(1-2): 3-27.
- Stearns, M. L.  
 1975 Life Cycle Rituals of Modern Haida. In D. B. Carlise (ed.) *Contribution to Canadian Ethnology, Canada* (National Museum of Man Mercury Series. Ethnology Service Paper 31). Ottawa: National Museum of Man.  
 1977 The Reorganization of Ceremonial Relations in Haida Society. *Arctic Anthropology* 14(1): 54-63.  
 1981 *Haida Culture in Custody: The Masset Band*. Seattle: University of Washington Press.  
 1984 Succession to Chiefship in Haida Society. In J. Miller and C. M. Eastman (eds.) *The Tsimshian and Their Neighbors of the North Pacific Coast*, pp. 190-219. Seattle: University of Washington Press.  
 1990 Haida Since 1960. In W. Suttles (ed.) *Northwest Coast* (Handbook of North American

- Indians, Vol. 7), pp. 261–266. Washington DC: Smithsonian Institution.
- Steedman, S. and J. N. Collison (eds.)
- 2011 *That Which Makes Us Haida: The Haida Language*. Skidegate, BC: Haida Gwaii Museum Press.
- Steltzer, U.
- 1984 *Haida Potlatch*. Seattle: University of Washington Press.
- Stevenson, I.
- 1975 The Belief and Cases Related to Reincarnation among the Haida. *Journal of Anthropological Research* 31(4): 364–375.
- Swan, J. G.
- 1876 The Haidah Indians of Queen Charlotte's Island, British Columbia: With a Brief Description of Their Carvings, Tattoo Designs, etc. *Smithsonian Contributions to Knowledge* 21(4): 1–18.
- Swanton, J. R.
- 1903 The Haida Calendar. *American Anthropologist* (New Series) 5(2): 331–335.
- 1904 The Development of the Clan System and of Secret Societies among the Northwestern Tribes. *American Anthropologist* (New Series) 6(4): 477–485.
- 1905a Contributions to the Ethnology of the Haida. *Memoirs of the American Museum of Natural History* (Publications of the Jesup North Pacific Expedition 5) 8(1): 1–300.
- 1905b Types of Haida and Tlingit Myths. *American Anthropologist* (New Series) 7(1): 94–103.
- 1905c Haida Texts and Myths: Skidegate Dialect. *Bureau of American Ethnology Bulletin* 29: 1–448. (Reprinted: Scholarly Press. St. Clair Shores, Michigan, 1976.)
- 1908 Haida Texts: Masset Dialect. *Memoirs of the American Museum of Natural History* 14(2) (Publications of the Jesup North Pacific Expedition 10(2)). (Reprinted: AMS Press, New York, 1975.)
- Takeda, L.
- 2015 *Island's Spirit Rising: Reclaiming the Forests of Haida Gwaii*. Vancouver and Toronto: UBC Press.
- Takeda, L. and I. Røpke
- 2010 Power and Contestation in Collaborative Ecosystem-based Management: The Case of Haida Gwaii. *Ecological Economics* 70(2): 178–188.
- Thomlinson, E. and G. Crouch
- 2012 Aboriginal Peoples, Parks Canada, and Protected Spaces: A Case Study in Co-management at Gwaii Haanas National Park Reserve. *Annals of Leisure Research* 15(1): 69–86.
- Thornton, T. F.
- 2015 The Ideology and Practice of Pacific Herring Cultivation among the Tlingit and Haida. *Human Ecology* 43: 213–223.
- Townsend, J.
- 2009 On Haida Terms Self-Determination and Land Use Planning on Haida Gwaii. MA Thesis, Department of Geography, York University, Toronto, Ontario.
- Townsend-Gaulet, C.
- 1994 Northwest Coast Art: The Culture of the Land Claims. *American Indian Quarterly* 18

- (4): 445–467.
- Turner, N. J.
- 1973 Plant Taxonomic Systems and Ethnobotany of Three Contemporary Indian Groups of the Pacific Northwest Coast (Haida, Bella Coola, and Lillooet). Ph.D. Thesis, Department of Botany, University of British Columbia.
- 1974 Plant Taxonomic Systems and Ethnobotany of Three Contemporary Indian Groups of the Pacific Northwest (Haida, Bella Coola, and Lillooet). *Syesis* 7 (supplement 1): 1–104.
- 2001 Coastal Peoples and Marine Plants on the Northwest Coast. In *International Association and Aquatic and Marine Science Libraries and Information Centers Conference*, pp. 69–76. Victoria, British Columbia, Canada. <http://darchive.mb/whoiibrary.org/handle/1912/2545> (accessed October 20, 2021)
- 2004 *Plants of Haida Gwaii*. Winlaw, BC: Sono Nis Press.
- Turner, N. J., I. J. Davidson-Hunt, and M. O’Flaherty
- 2003 Living on the Edge: Ecological and Cultural Edges as Source of Diversity for Social-Ecological Resilience. *Human Ecology* 31: 439–461.
- Van Den Brink, J. H.
- 1974 *The Haida Indians: Cultural Change Mainly between 1876–1970* (Monographs and Theoretical Studies in Sociology and Anthropology in Honour of Nels Anderson, No. 8). Leiden: Brill.
- Von Der Porten, S.
- 2012 Canadian Indigenous Governance Literature: A Review. *AlterNative* (8): 1–14.
- 2014 Lyell Island (Athlii Gwaii) Case Study: Social Innovation by the Haida Nation. *American Indian Culture and Research Journal* 38(3): 85–106.
- Von Hopffgarten, D.
- 1978 The Haida Raven: A Zoological and Symbolic Interpretation. MA Thesis, Department of Anthropology and Sociology, UBC.
- Weiss, J.
- 2018 *Shaping the Future on Haida Gwaii: Life Beyond Settler Colonialism*. Vancouver and Toronto: UBC Press.
- 2020 Giving Back the “Queen Charlotte Islands”: The Politics of Names and Naming between Canada and the Haida Nation. *Native American and Indigenous Studies* 7(1): 62–86.
- White, F.
- 2006 Rethinking Native American Language Revitalization. *American Indian Quarterly* 30 (1–2): 91–109.
- 2020 Keeping Haida Alive through Film and Drama. In W. de Lima Silva and K. J. Riestenberg (eds.) *Collaborative Approaches to the Challenges of Language Documentation and Conservation: Selected Papers from the 2018 Symposium on American Indian Languages (SAIL)* (Language Documentation and Conservation Special Publication 20), pp. 107–122. Honolulu: University of Hawai’i Press.
- Whitney-Squire, K.
- 2014 Community-based Tourism and Language Revitalization in Haida Gwaii, Canada. Ph.D. Dissertation, University of Otago, New Zealand.

- 2016 Sustaining Local Language Relationships through Indigenous Community-Based Tourism Initiatives. *Journal of Sustainable Tourism* 24(8-9): 1156-1176.
- Whittington, E. M.  
1989 The Bear-Mother Theme: Exploring the Narrative in Haida Argillite. *Athnor* 8: 23-31.
- Wilson-Raybould, J.  
2019 *From Where I Stand: Rebuilding Indigenous Nations for a Stronger Canada*. Vancouver: UBC Press.
- Young, J. O.  
2000 The Ethics of Cultural Appropriation. *The Dalhousie Review* 80(3): 301-316.
- Zandvliet, D. B. and D. R. Brown  
2006 Framing Experience on "Haida Gwaii": An Ecological Model for Environmental Education. *Canadian Journal of Environmental Education* 11(1): 207-219.
- Zorilla, J. J.  
2000 Authenticity in the Context of Ethnic Tourism: The Local Perspective. *Travel and Tourism Research Association Whitehouse, Canada*, September 17-19, pp. 120-127.